
ボディーガードは魔法少女

建御雷神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボディーガードは魔法少女

【Nコード】

N7335X

【作者名】

建御雷神

【あらすじ】

7月27日、明日から夏休みという事で浮かれていた俺こと、高校2年生の真之乃秀まののしゅうの前に謎の金髪碧眼のツインテールの少女が現れた。自分は未来からやってきたというトンデモ設定を語る少女は更に自分の事を『上級魔術師トップソーサレス』——つまりは、“魔法少女”だと言う。色んな設定が混じっているようなそいつは更に俺に対してトンデモ発言をしてきて——。

7月27日

「夏休み、どうする？」

「あん？」

7月27日——高校の終業式からの帰り道にて。

腰の辺りまである艶やかな黒髪が特徴の少女——夜^{やか}華^{きりか}霧歌は俺にそんな事を問いかけてきた。

「どうするって……明日から否応無しにやってくる夏休みに対しての今の心境を語ればいいのか？」

「私がそんな捻くれた答を待ち望んでいると思う？」

「いや、全く以て思わないな」

「そう思うのなら、そんな事は言わない事、良い？」

「は、ハイ……いや、その、ちょっと明日からの夏休みに浮かれててさ。ちよつとした悪ふざけを敢行しようと思いついたから」

「全くもう……秀ちゃんはいつまで経ってもそういう所だけは変わらないんだから」

そう言つて——俺の隣を歩く霧歌はぷうつと不満気に頬を小さく膨らませる。

夜華霧歌——彼女は一言で言うなら、俺の幼馴染だ。

彼女とは幼稚園の頃からの付き合いで、その後は小学校、中学校、そして今の高校と——ずっと共に歩みを進めている。

もしかすると、このまま二人でハッピーエンドまで到達してしまうのではないか。

余りにも歩む道が同じ過ぎて俺は時折そんな事を考えてしまう——のだが。

まあ、そんな事は無いのだろう。

だって、僕は単なる平凡な学生で、彼女は生徒会の副会長も務めていて、学校では常に成績がトップのエリートだからだ。

同じ道を歩んでいても、互いに起きる変化は言うまでも無く大きく違う。

嫌になってくる程に——違っている。

昔、一緒に遊んでいた男女——その内の男子が平凡になって、その内の女子がエリートになる。

よくある話だ。

そして、大概はその後二人を待ち構えているのは困難を乗り越えた先にあるハッピーエンドなのだが——。

今の所、ハッピーエンドの兆しどころか、困難さえ俺達の目の前に

立ちはだかる気配は感じられない。

非常に残念だ。

いや、冗談抜きで。

「ねえ、秀ちゃん」

「あの子、霧歌……その呼び方、中学の時にはもう止めてくれって俺何度も頼まなかったっけ？」

「アレ？ そうだったかな？」

そうだったかな、じゃねーよ。

女子なら未だしも、男子が女子からあだ名で呼ばれるという事に何かしらの抵抗の意思を俺が見せ始めたのは中学校に入ってからだ。

そこで、俺は霧歌に土下座までしてそのあだ名を止めてくれるように頼んだのである。

「忘れたとは言わせねーぞ。俺なんかお前の前で土下座までして見せたんだからな」

「過去を勝手に改竄^{かいざん}するのは止めてよ……秀ちゃん、私に土下座なんてしてないよ？」

「……………」

どうやら、土下座まではしていなかったらしい。

それはそれで安心した。

何と言うか……男としてのプライドが護られたような気がする。

「とにかく、俺の事をもうあだ名で呼ぶのは止せ」

「えーっ、何でよー。可愛いよ？ あだ名」

「男に可愛さなんて要らない」

「それはおかしいよ……何かこう、女尊男卑じょそんだんひみたいな」

「難しい言葉を使って誤魔化そうとするな。そんな言葉、見た事も聞いた事も無いぞ。男尊女卑だんそんじょひなら知っているが」

「……秀ちゃん、女尊男卑は今の日本を語る為の、男尊女卑に変わる四字熟語だよ？」

「……………」

……時折、無知は俺に“羞恥”という贈り物をくれる。

いや、好きで貰っている訳では無いのだが。

「あ、揚げ足を取りやがって……」

「秀ちゃんがもっとちゃんと勉強すれば良い話じゃない」

「ふざけるな。俺は勉強なんかしない」

「高校生が言う言葉じゃないねえ……」

呆れたように苦笑を見せる霧歌。

「夏休み明けには実力テストがあるんだよ？」

「知ってるよ。夏休み明けには忘れているだろうけど」

「秀ちゃん、夏休み明けにあるテストを夏休み明けには忘れているって、かなり危ない事だという事に気付いてる？」

「とにかく、俺は勉強なんかしねーよ。来年もあるし、来年一年間頑張ればどっかの大学くらい受かるだろ」

「そういう安易な考えが足を突き崩すんだよ……秀ちゃん。仕方ないなあ……それじゃあ、夏休みの何日間か私が個人レッスンして上げるから、頑張らない？」

「こ、個人レッスンってお前……俺達、まだ高校生だぜ？」

「……秀ちゃん」

「ハイ」

「怒るよ」

「……申し訳ありませんでした」

俺は素直に謝った。平謝りをした。

今のは完全に悪ノリをした俺が悪い。

いや——悪ノリをしている時点で悪いのはどう考えても俺なのだが。

7月27日？

「それで、話は元に戻るけど……夏休みはどうする？ 私と一緒に勉強する？」

「夏休みにお勉強、ねえ……」

「物凄く嫌そうな顔だね……まあ、解ってはいたけどさ」

再度、俺の顔を見て苦笑を見せる霧歌。

ていうか、顔を見られて苦笑を浮かべられるというのもどうなのだろうか。

「そうだなあ……まあ、気が向いたらお願いしようかな」

「おつ、普段の秀ちゃんに似合わず前向きな考えだね」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

今の言葉だけで俺は“前向き”だと捉えられてしまうのか。

それじゃあ、普段の俺はどれだけ“後向き”な人間だと言うのだ。

「まあでも、私と一緒に勉強会した方が秀ちゃんも得だと思っよ？」

「えっ、何で？」

「秀ちゃん、今日夏休みの宿題貰ったでしょ？」

「ああ、そういえばそんなものも貰ったっけ……一瞬、現実逃避しようとして教室のゴミ箱に捨てそうになったけど」

「……秀ちゃん、あなたは一体どれだけ勉強というものが嫌いなのですか？」

「戦争や紛争、その中で死んで行く子供達——そんな感じの現実と同じくらいに嫌いだな」

「なるほど……秀ちゃんがどれくらい勉強というものが嫌いなのが理解できた」

「それで、どうしてお前と一緒に勉強会した方が俺にとって得なんだ？」

「だって、解らない所は一緒に考えられるでしょ？」

「なるほど、確かに……解らない所は霧歌から写して貰えば良いし——」

「解らない所は一緒に考えられる、でしょ？」

「……ハイ、そうですね」

……霧歌は俺の言葉を遮る勢いでこちらに眼前まで顔を近づけつつ半ば俺を脅すようにそう言うのだった。

つか、怖いよ、霧歌。

今はマジで怖かったよ。

「それに……秀ちゃんと一緒に居られる時間も増える、し」

「あん？ 今何か言った？」

「う、ううん……何でも、ないの、何でも」

「そうか……それならいいけど」

今、霧歌が何か口走ったような気がしたんだけど……空耳だったか。

「それじゃあ、早速明日から勉強会を決行しましょうか」

「明日から!？」

余りの急ピッチな予定に俺は思わず叫び声を上げてしまっていた。

俺達の通う高校は住宅街の傍にあつて、無論今も俺達は住宅街の中にある帰路を使っている為——もしかしたら、家の中に居る主婦や子供達に声を聞かれてしまったかも知れない。

「あ、明日から、って、お前……幾ら何でも早過ぎるだろ」

「そうかな……私はいつもそうしてるけど？」

「あんな、エリートのお前の日常を平凡な俺に押し付けられても困るんだよ」

お前の日常はお前にとって日常であり、俺にとっては非日常だから

な。

天と地、月とスッポンくらいに違うのだ——過ごしている時間は同じでも。

「エリートって……私は別にエリートでも何でも無いよ」

「お前をエリートと呼ばずして他に何と呼べと言っただよ。頭脳明晰で成績優秀——そんなお前がエリートという呼ばれ方を嫌うのなら今日から俺はお前の事を『エリート・ウーマン 霧歌』と呼ぶぞ」

「うーん……別にカッコイイからそれでも良いけど」

「マジで言ってるのかお前！」

しまった……霧歌のこういうネーミングセンスが壊滅している事をすっかり忘れていた。

壊滅しているというか、荒廃しているというか、崩壊しているというか、何だろう。

とにかく、霧歌のこういったセンスは酷いのだ。

それを考慮するなら、“秀ちゃん”というあだ名はまだマシなのかも知れない。

……いや、だからと言ってそのあだ名を認める訳では無いが。

「ていうか、夏休みの初日から宿題をする私を秀ちゃんは“エリート”って呼ぶけど……あつ、『エリート・ウーマン 霧歌』だっけ

「？」

「言つな。そのあだ名はもう忘れる」

何か俺が恥ずかしくなる。

くそっ……霧歌を辱める為に作り上げたあだ名でどうして俺が羞恥で悶えないといけないんだ。

何かまた揚げ足を取られているような気がする。

気のせいだろうか。

気のせいであつて欲しい。

「それ自体は別段“エリート”^たって訳じゃないのよ？ 夏休みの初日から宿題をする人くらい、沢山^{たくさん}居るし」

「それって本当なのか……？ 夏休みの宿題を夏休みの最終日辺りに全て片付けている俺にとってはお前達の考えは解らないな」

「ていうか、秀ちゃんって毎回夏休みの宿題は最終日まで全く手を付けない人だったんだね……まあ、そこはあえて今はツツコまないけどさ」

「大体」と霧歌は人差し指を立てて説明口調で続ける。

「夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせたら、それ以降は夏休みが終わるまでずっと宿題の事なんか気にせずに遊べるんだよ？ そっちの方が得だと思わない？」

「……あのな、霧歌？」

「うん、何？」

「お前に良い事を教えてやるよ」

「良い事？」

「俺みたいな宿題を最終日まで全く手を付けない奴って言うのはな、まず、夏休みが始まった瞬間から宿題という“存在”そのものを頭の中から消してしまっているんだよ。だから、夏休みが始まって一週間以内に宿題を終わらせた方が得——なんて考えさえ、最初から俺の頭の中には入っていないという訳なのさ。解ったかい？」

「それは解ったけど……あの、そういう事を何か得意気に語られても私困るんだけど」

「でもまあ、夏休み中は何度かお前に宿題を写させて——いや、一緒に考えさせて頂こうかな、うん」

その言葉を言い切る途中で俺は霧歌から鋭い視線で睨まれたので——ほぼ条件反射で台詞を言い直した。

「……まあ、秀ちゃんが来てくれるのなら、もう何でも良いかなあ」

「えっ、それじゃあ宿題を——」

「写させませんから安心して下さい」

「……………」

どうやら、どうあっても霧歌は俺に宿題を写させる気は無いらしかった。

つか、安心して下さいって。逆に安心できねーよ。

不安だ……難問にぶち当たったら、その問題で一日の貴重な時間を費やしてしまいそうな気がする。

7月27日？

「仕方ない……宿題の件はそういう事にしておくか」

「何で上から目線なのよ」

「ていうか、霧歌。ちょっと脈絡も無い話をしてもいいか？」

「脈絡も無い話という時点で何かアレだけど……まあいいわ、どうぞ、秀ちゃん」

「夜華霧歌って名前……何か、物凄くレアな感じだよな」

「本当に脈絡も無い話ね……」

「何だよ、ちゃんと話す前に“脈絡が無い”って俺は言ったぞ」

「まあ良いけど……そうね、『夜華霧歌』——確かに珍しい名前よね。苗字も、名前も……まあ、そういう所を実は気に入ったりしているんだけど」

「その点については俺も同感だな。『夜華霧歌』って……何か、力ッコイイ名前だよな」

「でも、珍しい名前と言えば、秀ちゃんの名前だってそうだよな？」

「えっ、そうか？」

「そうよ。真之乃秀^{まののしゅう}なんて……名前はともかく、苗字は珍し過ぎる

「ほどに珍しいわよ」

「うーん……そうか？ 俺は今までこの苗字だったから、そこまで珍しいとも思わなかったけどな」

「ポケモンで言うなら、草むらから色違いポケモンが出て来るくらいにレアだと思うな」

「止める、霧歌。その例えだけは止めてくれ」

何か色々と危ない気がする。ていうか、その例えは確実に危ない。

「しかし、そうか……お前の例えが当たっているのなら、俺の名前——と言うより、苗字は中々に珍しいものだっただな、今更ながら気付いてしまったぜ」

「この世に生を受けて17年——大きな発見だね、秀ちゃん」

「おうよ、やったぜ、霧歌」

「やっぱり、その嬉しさは色違いが草むらから出て来たくらいに嬉しいの？」

「だから、その例えは止めてくれて言ってるんだろ。いや、まあ、そのくらいに嬉しいかも知れんが」

「でも、色違いと言えば、最近やってないなあ……黒と白が出たけど、ちよつと熱中したら全クリしちゃったし」

「……霧歌、お前さっきから発言が色々ギリギリだぞ」

「秀ちゃんは黒白どっち派？」

「お前、さり気無く俺の事も巻き込もうとしているだろ」

「良いから、答えてよ、秀ちゃん」

「俺は……白だな、ていうか、白以外には考えられないな」

まあ、白以外には黒しかもう選択肢は無いのだけれど。

「黒って何か……ほら、伝説がゴツゴツしてるって言うかさ」

「えーっ、でもネーミングに関してはこっちの黒の方が上だと思うなー」

誰もお前にだけはネーミングの事を言われたくは無いと思う——そう思う俺だったが、決して口には出さない。

口に出せば、霧歌が怒るか、もしくは凹んでしまふ事間違いないからだ。

「ほら、カッコ良くない？　ゼクロ——」

「わ——っ！　言うな！　何言ってるんだお前！　バカかお前！」

「秀ちゃんにバカだと言われる日が来るんなんて……何か心外だなあ」

「いや、お前バカだろ！ 実はバカだろ！ エリートと見せかけて
実はバカなんだろ！」

「私はバカじゃないし、そもそもエリートでも無いよ、秀ちゃん。
ていうか、バカって言う方がバカなんだよーだ」

そう言っつて霧歌は俺に舌を出してくる。

典型的な相手を挑発する行為の一つだ。

しかし——まあ、何と言うか、霧歌がやると長髪で苛々する以前に
何か萌え——ゴホン、いや、俺は何も言っていない。

別に、霧歌が俺に向かってべーっ舌を出してきたとしても、俺は
その行為に対して“萌え”を感じたりはしないし、心に何かキユン
と来るものを感じたりもしない。

本当だから。

いや、冗談抜きでこれは本当だから。

可愛いとは思っただけれども。

.....。

「.....秀ちゃん？」

「は、ハイッ？」

「今、何か私に対して邪な想像よこしまなと言うか、感情を抱かなかった？」

ば、バレてる！？

何だこいつ、まさか霧歌には人の心を読む力があると言うのか！

「……そ、そんな訳ないじゃん。俺がお前に対して邪な想像とか感情を抱くなんて……なあ？ 知ってるか？ 俺って、家の中では『善意の塊』って呼ばれてるんだぜ？」

「へーっ、それはまた狭い範囲の中での通り名だね、秀ちゃん、私見直しちゃった」

「そ、そうだろう？ どうせなら、もっともっと尊敬してくれても構わないぜ？」

「……秀ちゃん」

「何だ？」

「余り調子に乗ると怒って、それから……」

「何でそこで言葉を区切るの！？ なあ、お前が怒った後にはどんな壮絶な仕打ちが俺に待ち受けているんだよ！」

聞きたくはないけど逆に気になって仕方が無い！

「あつ、気付けばもういつもの分かれ道だね」

霧歌の言う通り、気付けば俺達の前には左右に分かれたＴ字路があった。

ここで、いつも俺達は別れる。

霧歌は右の道に、俺は左の道に。

それぞれ——別れて、歩いて行く。

「それじゃあね、秀ちゃん」

「おう、霧歌」

「帰ってからまた、メールするからね」

「ああ、明日の打ち合わせだろ？ 待ってるよ」

「うん」と霧歌は何故か嬉しそうに満面の笑みを俺に見せて。

「じゃあね、秀ちゃん」

そう言っただけに大きく手を振った霧歌は——俺に背を向けて自身の帰路を歩き始める。

「……さてと」

そして、帰路を歩いて行く霧歌を暫しの間見送った俺も自身の帰路をゆったりとマイペースに歩き始める。

どうせ、明日からは夏休みだ。

実質、終業式が終わった今日から既に夏休みは始まっていると言っ

ても良い。

それ以前に急ぐ用事も無いし——時間もある。

だから、ゆっくりと家に帰ろうと思った矢先だった。

「……………ん？」

俺は地面に落ちていた“それ”を蹴飛ばしてしまった。

俺に蹴飛ばされた“それ”はアスファルトの上を滑空し——それから、ガチャンという金属音を立てて道路の上に落下した。

7月27日？

「何だ、あれは……？」

俺はそう疑問の声を漏らしながらも、その蹴飛ばしてしまった“それ”に歩み寄り、“それ”を拾い上げる。

俺が蹴飛ばしてしまったもの——ペンのような形をした白い物体だった。

いや、ペンのような形をしているとは言っても実際にはペンではないのだが。

ペンではなく——“それ”は何かの欠片に見えた。

ペンに近い形状をした何かの、欠片。

“それ”を俺は拾い上げたのだ。

「宝石……じゃあ、ない、よな？」

誰にでも無くそう確認を取る俺。

無論、俺は先ほど霧歌と別れたばかりであり、周囲には誰も居ない為、その問いに対する回答は幾ら待っても帰って来ない。

そして、俺がそんな問いかけをしてしまった理由は——ただ一つ。

その白い何かの欠片がキラキラと——太陽の光に反射してまるで宝

石のように煌びやかに光っていたからだ。

いや、ていうか、最早これは宝石なのではないだろうか？

「……………」

えっ、どうしよう。

この場合……交番に届けた方が、いいのか？

交番に届けた場合、その落とし物を拾ってくれた人には何割かお礼が貰える制度があったような気がする。

いや、お礼が欲しいが為に交番に届けるんじゃないぞ？

ただ純粹に、純粹に落とし主の事を思つての行動だからな？

勘違いしないように。

「……………」

——そして。

周囲の景色と、たった今拾い上げた宝石のような白い何かの欠片を何度も——何度も、何度も見比べて。

俺は。

突然だが、ここで余談を一つしておく事にしよう。

余談と言つか雑談だ。

俺の家は二階建ての一軒家である。

そして、俺の部屋はその一軒家の二階にあった。

俺の部屋にあるベランダに出る為の窓からは住宅街の屋根の海が一望できて——それはそれで俺はその景色を少し気に入っていたりする。

時が流れて、夕刻になれば外から暖かな茜色の光が差し込んで来て——外に広がる景色は一層幻想的なものへと変化する。

無論、俺の部屋にも窓からその光が差し込んでくる。

今は夏なので少しばかり暑い気もするが——それを気にしないほどに、俺は夕暮れ時の太陽が放つ茜色の光が好きだった。

——そして。

現在、時は夕刻。

今日もベランダに通じる大窓から太陽の光が部屋の中に差し込んでいる。

壁、床、ベッド、パソコン——色々なものが茜色の光に染まってい

る中で。

俺の勉強机の上に置かれたその宝石のような白い何かの欠片もキラキラと神々しい光を放っていた。

「……………」

……ああ、そうだよ。

結局、持ち帰って来てしまったのだ。

何とか夕暮れ時の茜色の光だとか、その辺りの素晴らしい風景で誤魔化そうかと思ったのだが——どうも、上手く行かなかったようだ。

幾ら現実逃避をしようとして目を逸らそうにも、実際に俺の勉強机の上には先ほど持ち帰った白い何かの欠片が置かれているのだから。

「ヤバい……何かヤバい代物だったらどうしよう……！」

俺はまるで土下座するかの如くベッドの上で小さく蹲ひづりりながら恐怖おのに慄く。

「ヤバい……何か、マフィアとかヤクザとか、その辺りの人達の所有物だったらどうしよう……！」

その可能性も決して否めない訳では無い。

あんなにキラキラと輝く美しいものだ——そういう裏の人間達の所有物だったとしたら。

俺の人生はもう、終わりだ。

「ヤバイ……質屋で高値で売ってしまったらどうしよう、100万とか」

そもそも、質屋とはそういう金額も出してくれるのだろうか。

俺は実際行った事無いから解らないけれど……ドラマとか、その辺の知識からすればそんな値段を出した所は一度として拝見した事が無い。

「ヤバイ……宝石店で物凄く高値で売ってしまったらどうしよう、1億円とか」

もう、あれだ、1億円とかで売ってしまった暁には俺はもう高校を止めて、大学にも行かなくて、勉強せずとも人生を満喫――。

……。

「って、俺途中からこの謎の物体を売る前提で話を進めてるじゃん！ 恐怖に怯えている俺は一体全体どこに行ってしまったんだよ！」

そんな感じで俺はベッドから勢い良く起き上がると全力でノリツツコミをした。

自分でボケて、自分でツツコンで、一つだけ解った大切な事が有る。

――それは。

「……空しくなるだけだったな」

空しくなるだけだった。

悲しくなるだけだった。

心に一生モノの傷が入るだけだった。

もう二度と一人ボケ、ノリツツコミはしないでおう——俺はそう
心に固く誓った。

7月27日？

「ってオイ、違っだろう」

言っている傍からノリツツコミをしてしまっている俺であるが、そこは華麗にスルーして欲しい。

問題なのは、この謎の物体の正体だ。

本当にこれは一体全体何なのか？

俺の予想通り、これは宝石の類なのか？

宝石の類なら、これは質屋や宝石店で売れるのだろうか——って違っ、そうじゃなくて。

「……何なんだろうな、これ」

宝石——と、一概に思おうと思えば、俺はその物体を宝石と認識する事が出来ただろう。

——しかし。

何かが、違う気がしたのだ。

どうしてそう思ったのかは解らない——どうしてそう言い切れたのか、その自信がどこから来たものかも解らない。

——ただ。

その白い何かの欠片は——“宝石”ではない。

何故か、俺はそう思う事が出来た。

誰かにこれが何なのかと問われれば、正体は解らなくとも、とりあえず“宝石ではない”——と俺は答える事が出来ただろう。

——そして。

ピンポン、と。

不意に家のインターホンが鳴り響いたのだ。

「あつ、ハイ」

俺はそのインターホンに——つい、いつものように応対してしまった。

どうして、もう少し細かく考えなかったのか。

この謎の物体を手に入れた直後にこの家を訪ねてくる者であるのに
も関わらず。

——しかし。

インターホンが鳴るという事はつまり、この家に客人が訪れた事。

インターホンを“そういう風”に認識してしまっている俺は殆ど^{ほとん}条件反射で立ち上がり、ベッドから下りて、部屋を出ると、一階へと

足を運んだ。

それから、俺は玄関に辿り着くと、扉の鍵を解除して。

「ハーイ、どちら様〜？」

そう言いながら——俺は玄関扉を押し開ける。

玄関に射し込んでくる茜色の光。

扉の向こう側——我が真之乃家の玄関には変わった客人——もとい、少女の姿があった。

背丈は俺と同じくらいで、紅のライダースーツのようなぴっちりとしたものを身に纏っていた。

肩や膝、そして手首に装着しているのは何かの防具だろうか——何が見慣れない機械のようなものにも見えるが。

——そして。

その格好こそ珍しかったが——俺の目を引いたのはその少女の“髪の色”。

少女の髪の色は金色、だった。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪、後ろ髪は二つに分けて結ばれている——いわゆる、ツインテールというヤツだろう。

「……………」

俺は目の前に現れたその少女に言葉を無くす。

それから、対する少女は俺の姿を見てニツと笑みを見せると。

こう言った。

「……あなた、真之乃秀よね——」

その少女の言葉は最後まで俺の耳には届かなかった。

何故なら、俺が玄関扉を勢い良く閉めたからだ。

それならば、何故扉を閉めたのか——そう問われてみるとこれと言った理由は浮かんで来ない。

強いて理由を挙げるとするなら——そうだな、本能的なもの？

だって、よく考えてみるよ。

突然目の前に現れた不思議な雰囲気を漂わせる少女がどういう訳か俺の名前を知っているんだぜ？

もう本能的に閉め出すしかないだろうよ。

嫌な予感しかしねーよ。

「……さて、と……今日の晩御飯は何にするかなあー」

「ってちよつと！ 何で閉め出すのよ！ 意味解んない！」

俺の後ろで扉が開く音が聞こえたと思えば、それとほぼ同時に先ほどの金髪の少女のものと思われる怒声が飛んできた。

俺は憂鬱な気分で後ろを振り返る。

やはり、先ほどの金髪の少女は有ろう事か家の玄関扉を勝手に開けて玄関に足を踏み入れていた。

「オイコラ、お前」

「お前って呼ばないで！　ちゃんと名前で呼んでよ！」

「いや、俺お前の名前知らないし」

「フンツ！　私だってあなたなんか教える名前なんか持ち合わせていないわよ！」

「お前、言葉が支離滅裂になってるぞ！？」

俺に名前を呼ばたいのか、それとも呼ばせたくないのか、どっちなんだよ。

「いや、それ以前に、何でお前人の家に勝手に入って来てるんだ。お前はさっき門前払いをしたはずだろうが」

「ていうか、それ以前にどうして私の門前払いしたのか、理由を聞かせて貰いましょうか！」

「怪しかったから、以上」

「理由が簡易過ぎる！ ていうか、一目見ただけで私が怪しい人物なのかどうか見抜ける訳がないでしょ！ 常識的に考えて！」

「解るよ、解るに決まってるんだろ。突然現れた見知らぬ金髪の女性が俺の名前を何故か知っていた、これだけでお前は十分に、いや、十二分に怪しい奴だよ」

「解らないじゃない！ ただ単にあなたの事を好き好んで日々ストーキングしている可愛い女の子かもしれないじゃない！」

「ただのストーカーじゃねーか！」

「誰がストーカーよ！」

「いや、お前が言ったんだろ！？」

何だよ、こいつ……超遣り辛いんだが。

「それで、お前の用件は何だよ。何の為にここに来たんだ。まさかガチでストーカーじゃないだろうな」

「自惚はなはれてんじゃないわよ。あなた、まさか自分がストーカーされるようなモテモテな人だって誤認しているんじゃないでしょうね」

「……………」

明らかに罵られた訳だが——何だろう。

返す言葉が見付からなかった。

というより、何だか、穴があつたら入りたい気分とてつに途轍もなく襲われた。

「……最後に確認を取るけど、アンタが真之乃秀——で、良いのよね？」

「ああ、そうだけど……お前は？」

「私の名前は——ウリアルル・ブレイザー。あなたに会いに来たの」

「俺に会いに……？ 何だ、告白でもしに来たのか？」

「あなた、次に話を逸らしたら殺してやるからね」

「……………」

何か、物凄い形相で凄まじい脅し文句を言われた。

「冗談だったのに……」。

「……俺に会いに来たって、用件は何だよ」

「……あなたを“護る”為よ、真之乃秀」

「俺を護る——って、一体何から？」

「私達の、敵から」

「俺達の……敵？」

「ええ、そう」と金髪の少女——ウリアル——ブレイザーは頷いて。

俺に対してこんなトンデモ発言を放ったのだった。

「私はあなたを護る為に未来からやってきた『^{トップソーサレス}上級魔術師』——魔法少女よ」

上級魔術師

時計の秒針が時を刻む音が一定のリズムで部屋に響く。

俺は腕組みをした状態で部屋の机の椅子に堂々とした姿で座っていた。

「……もうそろそろか」

俺は部屋の時計を見上げて呟く。

あと10秒、あと7秒、あと3秒、あと1秒――。

「よしっ、完成だ!」

午後7時38分――俺は机の上のカップラーメンの蓋ふたを勢い良く開けた。

その瞬間、湯気と共に部屋をカレーの香ばしい匂いが包み込む。

ちなみに、例のカップラーメンのシリーズの中で俺が一番好きなのはカレーだ。

まあ、だからこうして家の中にある数あるカップラーメンの中からカレーを選んでいるのだが。

「相変わらず美味そうだな……よし、いただきまーす」

俺は礼儀作法の一つである食事前の挨拶をすると夕飯であるカップ

ラーメンの容器を手取る。

そして、箸で口にカレーに塗れた麺を加えるとそれを一気に啜って――。

すぐ左隣でベランダに通じている大窓が開く音が聞こえた。

「あら、良い匂いね」

「ブ――ッ！」

俺は口に含んでいた麺をスープごと全て吹き出した。

「うわっ、ちょっと何やってんのよ！ 汚いわね！」

「ゲホッ、ゲホッゲホッ……だ、誰のせいだと、思って、いるんだよ……！」

ていうか、それ以前に。

「ていうか……お前、どうやってベランダから入って来たんだ」

「さあね。詳しい理屈は話さないけど、私が魔法少女だからじゃない？」

「まだ言ってるのかよ、お前それ……」

つい先ほども、俺はこの少女――ウリアルル・ブレイザーからそんなトンデモ発言を聞いていた。

有ろう事か、この少女は何の躊躇^{もち}も無く自分の事を“未来からやってきた魔法少女”だと抜かしやがったのだ。

その時、俺はこう思った。

ああ、これは物凄く痛い奴が来たな、と。

だから、俺はこいつをとりあえずもう一度外に閉め出して、ちゃんと玄関に施錠して、夕飯を食べるべく部屋に戻って来ていたのだが――。

「ていうか、お前って言わないでよ、ちゃんと名前は教えたでしょ？」

「えーっと……ウリアーロイレイザーだっけ？」

「ウリアール＝ブレイザー！ 人の名前を間違えるなんてどういう事なのよ、あなた！」

「いや、だって、お前みたいな名前なんか今まで覚えた事も無いし……」

ていうか、それ以前に外国人の友人を持った事すら無い。

こいつを外国人の“友人”だと呼んでいいのかは――まだ、解らないけれど。

「何か、ややこしいんだよな、外国人の名前って……カタカナだし、パツとしないって言うか」

「あなた、今世界中の名前がカタカナ表記の人に喧嘩を売ったからね？」

「ていうか、実際ウリアーロゥイレイザーの方がカッコ良くな？
もういいだろ、ウリアーロゥイレイザーで。いつその事、それに改名しろよ、ウリアーロゥイレイザーに」

「何であなたの意見で勝手に私の名前を改名しないといけないのよこの屑が」

「屑？ お前今俺の事を屑って言ったか！」

「いいえ、言っていないわ、ゴミ屑の聞き間違いじゃない？」

「もつと酷くなつてんじゃないか！」

「ていうか、それを言うならあなたの名前だつてややこしいじゃないの。真之乃秀……ああもう、何で“の”が苗字にそれも連結して二つも入っているのよ、殺すわよ」

「いや、先祖代々受け継がれてきた苗字に苛立ちを覚えて俺を殺そうとするな。それは色々間違っているというか、根本的に何かが間違ってるから」

そもそも、殺人予告をする事自体が間違っているのだが。

「真之乃秀、真之乃秀、真之乃秀……ああもう、やっぱり言い辛いわ。ねえ、苗字の“の”を1個少なくしてよ」

「知ってるか？ 苗字と言うものはそんなに簡単に変えられるもの

「じゃねーんだよ」

「良いじゃない、真乃秀の方が私的には結構カッコイイと思うわよ？」

「えっ、マジで？」

自分の苗字を否定される事は少し気に食わないけれど、何だろう、それでもカッコイイと言われる事は嬉しいと言うか、やぶさかではないと言うか、何と言うか。

「まあ、カッコイイというのは嘘なんだけど」

「嘘だったのかよ！」

畜生！ 人の心を弄もてあそびやがって！

「鬼！ 悪魔！ 鬼畜！ 人外！」

「ちよっ……な、何なのよ、急に！」

「今が青春の男子高校生の心を弄んだ罪だ！ この悪魔！」

「私は弄んでなんかいないわ。勝手に私に弄ばれたあなたが悪いのよ」

「自分の責任を被害者に押し付けるなんて最低だぞお前！」

「ていうか、もうあれね。真之乃なんて呼び難いから……あなたの事はこれから秀って呼ばせて貰うから」

「……………」

さり気無く俺の事を呼び捨てにする事を決定しやがった……。

「さて、ところで秀」

「何だ」

「お腹が空いたわ。私にもそれ作ってよ」

「外で生ゴミでも漁^{あさ}ってる——って痛^{いた}ってえ！」

脇腹に蹴りを食らった。

加害者の方は言うまでも無く、あいつだ。

上級魔術師？

「何しやがんだ！」

「何で私が生ゴミなんか漁らなきゃいけないのよ！ むしろ、秀がそれを私に譲渡して秀が生ゴミを漁りに行けば良いじゃないの！」

「お断りだね！ 断固としてお断りだね！ せめてこれがシーフードだったらお前にやったかも知れんが、残念ながらこれはカレーだ！ カレーは断固として譲渡しないと俺はこの世に生を受けたその日に神に誓ったんだよ！」

「何よ、そのどうでもいい誓いは！」

「どうでもいいって言うな！ どうでもいいって！ いや、俺も半ばどうでもいいって思っているけれど、他人からどうでもいいって言われると何かイラッとする！」

「秀もどうでもいいって思ってるんじゃないのよ！」

そんな時だった。

ぐうつうつうつ……。

何か——音が聞こえて来た。

正確は、誰かの腹が鳴る音が。

無論、自分の腹が鳴った事くらい解る為、今の音は俺の腹のもので

はない。

——と、言う事は。

「……………！」

——ていうか、そんな考えを巡らす前にウリアルル・ブレイザーが自分から赤面して自らの腹を両腕で抱き抱えるように隠していたので今の腹の音の犯人は一目瞭然だった。

「……………はあ」

「ちよっ、何ため息ついてるのよ！ い、今はっ、そのっ、別にお腹が空いた訳じゃなくて、そんな訳じゃ、なくて、その……………！」

「……………解ったよ」

そう言って俺は立ち上がると部屋の扉を開ける。

「ちよっど、何が解って——ていうか、どこに行くつもりなのよ」

「……………シーフード」

「……………えっ？」

「シーフード、今から下で作って来るから。その間に、俺のカレー盗み食いするんじゃないぞ」

俺はそれだけを言い残して部屋の扉を閉めようとして——。

「しゅ、秀！」

不意に部屋の中から聞こえて来たウリアルル「ブレイザー」の声に手を止めた。

俺は部屋の中を振り返る。

そこには、先ほどの羞恥による赤面とは明らかに違う——頬を若干赤らめたウリアルル「ブレイザー」の姿があつて。

「……そ、その」

そして、彼女はボソボソと呟くような声でこう言つたのだつた。

「あ……ありがと、ね？」

「……どういたしまして」

——そいつのお礼を初めて聞いたのが嬉しかったのだろうか。

そう言つて、扉を閉める俺の顔にはほんの少しの笑みが浮かんでいた。

シーフードのカップラーメンを作つた俺はついでにグラスにお茶も注いでトレイにそれらを乗せて部屋まで運んだ。

部屋の扉を開けると同時に、中でウリアル「ブレイザー」が立ち上がるのが見えた。

そこまで腹が減っているという事なのだろうか。

まあ……あれほど大音量で腹の虫が鳴くのを聞いてしまえばそんな事は一目瞭然、と言うよりも、一耳瞭然なのだろうけれど。

「ほらよ、作って来てやったぞ、有り難く食べる」

「あ、ありがと……秀」

「どういたしまして」

俺は適当に彼女に言葉を返しながら机の上に運んで来たトレイを置く。

そこで、俺はとある一つの小さな問題に気付いた。

しまった……彼女にどこで食事をさせるべきか。

「……………」

少し考えた後、俺は先ほどまで食べていたカレーのカップラーメンの容器と箸を持ってベッドの上に腰を下ろした。

「えっ、そこで食べないの？」

「明らかに不法侵入してきているお前に席を譲るのも何かアレだけど……それ以前に、お前は女子だからな。男尊女卑ならぬ、女尊男

卑じゃないが、こういう時は女子を優先させるべきだろ」

さり気無く、今日霧歌から学んだ言葉を使っている俺なのであった。大丈夫、こいつは霧歌の存在までは知らないだろうから、俺が霧歌から学んだ言葉をパクっている事には気付かないはずだ。

「そ、そっか……ふーん」

ウリアル＝ブレイザーの方はまた若干頬を赤らめて——俺に背を向けて、代わりに勉強机と向き合った。

「い、意外と……良い所あるのね、秀って」

「意外で悪かったな」

「……ね、ねえ」

「何だよ、早く食べないとラーメン伸びるぞ」

「秀は……どうして、私の事を名前で呼んでくれないの？」

「さっきも言ったけど、お前が不法侵入者である事も理由の一つだし、お前には失礼かも知れないが……アレだよ、長いんだよな、お前の名前」

「それなら……ウリアで良いわ」

「えっ？」

「う、ウリア……ウリアで、いいから」

「名前で、呼んでよ……」とウリアル＝ブレイザーはこちらに背を向けたままそう頼み込んで来た。

上級魔術師？

「……………」

そして、俺と言えば、そんな彼女の背中を見上げて——まあ、特にその頼みに断る理由も見付からなかったのだ。

「別に良いけど……それじゃあ、ウリアって、今度からそう呼べばいいんだな？」

「……呼んで、くれるの？」

「お前が呼べって言うんだ。仕方ないだろ」

すると、今度はウリアル「ブレイザー」、もとい、ウリアは嬉しそうな満面の笑みを浮かべてこちらを振り返って。

「秀って、やっぱり意外と良い所あるのね！」

——そう、言った。

「だから、“意外と”は余計だって言ってるだろ。お前は——」

「ウ・リ・ア！」

「——ウリアは、素直に人を褒めるといふ事を知らねーのか」

「知らない」

「一言であつさりと答えてんじゃねえ」

「ていうか、秀。何かトレイの上にお箸とフォークが乗ってるんだけど……何で？」

「いや、お前見た目外国人っぽかったから、念には念を入れてフォークも持って来てみた」

「フンツ、残念だったわね。私にはフォークなんて要らないのよ」

「そうか。それじゃあ、お前は箸を使えるという事なんだな？」

「使えないわ」

「使えないのかよ！ 何なんだよそのオチは！」

「という訳で、まあ、フォークを持って来てくれたのには素直に感謝するわ。ありがとね、秀」

「最初から箸は使えないって言えばいいのに……」

「ブツブツとそう言いながら俺はすっかり伸び切ってしまったっているカレーのスープに浸かった麺を箸で持ち上げる。」

「……んっ！ これ美味しい！ ねえ、これ美味しいわよ！ 秀、ねえ！」

「解った、解ったから。美味しいのは解ったから黙って食え」

「えーっと、これ“シーフード”って、言うのよね？ 美味しい

わねー、これ。明日もこれを私に譲渡する事を要求するわ、秀」

「要求するわ、じゃねえ。お前——」

「だから、ウーリーア！」

「——ウリア、お前は一体いつまでこの家に居座るつもりなんだよ」

「決まってるでしょ？ あなたを敵から完全に護り切るまでずーつとよ」

「だから敵って何なんだよ……」

訳が解らん。

何言ってるんだこいつは。

あれだろうか……いわゆる、“設定”というヤツなのだろうか。中二病に掛かっている奴が良く言つと言われている。

まあ、俺も中二病に掛かっている奴と面と向かって出会った訳では無いから良く知らないんだけど。

そして、こいつが——ウリアが、中二病だという可能性も有り得る訳だし。

ひょっとしたら、こいつが初めて面と向かって出会った中二病に掛かっている奴になるかも知れないのかぁ……。

……いや、別に嬉しくとも何ともないけれど。

「……それで？ お前は一体どんな脅威から俺の身を護ってくれるんだ？」

デュアルシステム サイエンスサイド
「『混合機関 科学発展側』」

「いや、そんな急に専門用語を使われても一寸たりとも理解が及ばないんだが」

「まあ、秀みたいな頭の中に脳味噌が入っているかどうかとも怪しい人の為に簡単に言わせて貰うと」

「簡易的な説明を行ってくれるのは助かるが、どう考えてもその前に一言余計な文章が添付されているのは気のせいかな？」

「魔術と科学の二つの文明を合わせた後に、科学側へと更に発展を遂げた機関って事よ」

「……なあ、それって簡易的な説明なんだよな？」

「えっ……まさか解らないの？ 今の説明で？」

「ガチで引いてんじゃねーよ！ ていうか、今の説明でお前の話を理解できる奴が居たらここに連れて来て欲しいわ！」

「はあ……これは、私が来た世界の事から話す必要がありそうね」

「ああ、是非ともそうしてくれ」

とは言うものの、俺はウリアの話を信じるつもりは毛頭も無いのだ

が。

だって、どうせ全てが“設定”だろ？

どんなに巧みで壮大で細かな設定を今から語るのか知らないが——
まあ、何にしても、俺はこいつの話を信じるつもりは無い。

何故なら——有り得ないからだ。

未来だとか、魔術だとか。

そんなものはこの世に存在しないはずのものだからだ。

人間は実際に目の当たりにしたものしか心の底から信じる事は出来ない。

幽霊とか、UMAとか、UFOとか——それらも本当に信じている
とか言う人は居るけれど。

その人でさえもきつとそれらの存在を心の底から認められている訳
では無いのだ。

何故なら——実際に目の当たりにした事が無いから。

だから、俺もウリアが言う未来や魔術の事は一切信じない。

薄情と思われるかもしれないが——人間とはそういうものである。

事件を起こした際に、物的証拠で有罪か無罪かが決まる。

きっと、それと同じ事だろうから。

上級魔術師？

だから、俺は“そういう志”の下に——ウリアの話をラーメンを啜りながら聞き始めた。

「——私はね？ 2056年からやってきたの」

「2056年って……えっと、今が2011年だから、45年後の世界か」

「そうね、45年後の世界」

「45年も——半世紀近く経つと、やっぱり世界も色々と変わっているのか？」

「ええ、変わってしまったているわよ、色々と」

「例えば……どんな所が？」

「世界そのものが変わってしまったわ。まず、2023年に日本の首都圏で大地震が起こったの」

そう言えば——そんな話を俺は聞いた事がある。

今から30年以内に首都圏で大地震が起きる確率が——えっと、何パーセントだっけ？

とにかく、ほぼ100パーセントの確率で起きる、らしい。

これはあくまで予想であり、推測であり、噂なのだが。

「その大地震で首都圏をやられた日本は土地的にも国家的にも壊滅を余儀なくされたわ。そして、日本は藁^{わら}をも縊^{すが}る思いで外国に——アメリカに助けを求めた」

「……その結果は？」

「まあ、アメリカも鬼じゃないからね。日本が伸ばしてきた手をちゃんと握り返してくれたわ。えっと、今のアメリカの大統領は……？」

「オバマだよ、バラク・オバマ」

「ああ、そうそう、そのオバマさんは本当に良い人よね」

「どうでもいいけどオバマさんって。」

「お前はアメリカ大統領の友達か何かなのか。」

「まあ、俺も呼び捨てにしているけれど。」

「……って事は、2023年——だったか？ その今から12年後の未来には、まだオバマは大統領としてご健在なのか」

「ええ、そうね。その年——2023年にはオバマさんは命を落としてしまっただけだ」

「えっ……何だよ、まさか暗殺とか？」

俺の問いかけに——ウリアは無言で首を左右に振って。

「——ハリケーンよ」

と、答えた。

「ワシントンがかつてない規模の大型ハリケーンに飲み込まれたの。ワシントンにはホワイトハウスがあるから——いや、“あつたから”、オバマさんはそれに飲み込まれて死亡したわ」

「マジか……それは、その、大変だな」

「他人事みたいに言っているけれど、そのハリケーンの被害は秀達——日本人にも襲い掛かったのよ」

「えっ、どうしてだよ」

「その大型ハリケーンはね、アメリカ国土の殆どを横断して回ったのよ……だから、首都圏の大地震で一時的に避難していた日本人もそのハリケーンに襲われて殆どの人が亡くなったわ」

「そして」とウリアは真剣な表情のまま続ける。

「事態はハリケーンだけじゃ終わらなかった——今度は地球上のあらゆる国で地震や竜巻、様々な自然災害が起こったのよ」

「……それじゃあ、世界は」

「だから言ったでしょう？ 世界そのものが変わってしまったって。自然災害は2023年から2025年の2年間に渡って世界中で連

続的に発生し続けたわ」

「……………」

いつの間にか——俺はウリアの語りに思わずラーメンを食べる手も止めて真剣に聞き入っていた。

どうしてだろう。

ウリアの語りは全て——“設定”のはずなのに。

「それから、2026年——世界の人口も現在の3分の1くらいまで減ってしまったそんな世界で、世界中のあらゆる国々が同盟を結ぶの」

皆で生き残る為の同盟——とウリアは言う。

「自然災害によって、世界は人だけでは無く資源や食糧も失ってしまっていたから……まあ、同盟は妥当な手段だと“思われていた”わ」

「……待て、“思われていた”？」

「そう……同盟を組んだ事が間違いだったの。結び合った契約は意外と簡単に解けてしまうものなのよ」

「それは……一体、どういう……？」

「今の戦争や紛争が行われている地域の事を考えればすぐに解るはずよ」

「……ああ」

「そういう事か」と俺は残念そうに呟く。

何となく解った気がした。

幾つもの自然災害が引つ切り無しに襲い掛かって来ていた非日常を切り抜けた後に。

そんな恐怖の日々を過ごした後に。

人々の精神が——まともなはずがない。

自然災害によって愛する人を失った人も居ただろう。

自然災害によってロクに食べ物や飲み物を供給できない日々を過ごした人も居ただろう。

言うなれば——戦争に負けた後の国、だろうか。

そんな荒廃して荒れ果てている国の中で真つ先に起こる事などたかが知れている。

「……紛争が、起こったんだな？」

俺の問いかけに——ウリアは無言で一度頷いた。

「幾ら同盟を結んだ所で、世界中の資源や食糧の数は決まっている——だから、人々は数少ないそれらを求めて、紛争を起こし、それ

はやがて戦争へと繋がり、同盟を組んだはずの世界はやがて2つに分裂したわ」

「そんな時よ」とウリアは俺を真っ直ぐに見つめてこう言った。

「あなたが——秀が、この世に本当の奇跡を齎もたらしたのは」

「……俺が、世界に、奇跡を？」

「秀は——2030年に、かつて地球上で栄えていた文明の一つ——『魔術』を復活させたの」

「俺が魔術を……復活？ そんな馬鹿な、俺は単なる平凡な一人の人間だぞ？ ていうか、2030年まで自然災害から生き抜いている事自体も奇跡なのに……そんな俺が、魔術を復活させた、なんて有り得る訳が無い」

「……ねえ、秀？」

そして——ウリアが次に放った言葉に俺は驚愕して目を見開く事になる。

上級魔術師？

「今日——“白い宝石のような何かの欠片”を拾わなかった？」

「……………！」

それを——“その事”を聞かれた瞬間、俺は余りに驚き過ぎて一瞬何の言葉も出せなかった。

「…………ウリア、お前どうしてその事を…………知って…………！」

「…………やっぱり、拾ったのね」

「それは鍵よ」とウリアは言った。

「いや、正確には鍵ではないのだけど——実際は、その欠片は鍵のような役割を果たしたわ。秀の持っているその欠片がかつて栄えていた魔術の文明と共鳴したの」

「それで…………この世に再び、魔術の文明が復活、したのか？」

「そう。秀の手によつて魔術は完全にこの世に復活した。火・水・風・雷——様々な力を無限に創造する事が出来るその文明を世界に復活させた事で、戦争は治まるかと思われていたの」

「…………でも、違つたんだな」

「…………さつき、同盟を結んでいた世界が2つに分裂した——って、言つたわよね？」

「ああ」

「世界中で復活した魔術的な文明はすぐさまその分裂した2つの世界のそれぞれで活用されたの——“兵器”として」

「それで、戦争が更に激化したのか」

「そういう事よ。そして、その分裂した2つの世界——ううん、2つのグループにはそれぞれ名前が付いたわ。科学と魔術を融合させて、更に魔術的に発展したグループ——『デュアルシステム混合機関 魔術発展側』、そして、こっちはさっきも言ったけれど、科学の魔術を融合させて、更に科学的に発展したグループ——『混合機関 科学発展側』」

「それで、お前の話によると俺は後者の——その、科学側に命を狙われているみたいだけど。どうして、俺はそいつらに命を狙われているんだ？」

「元々、グループ同士の戦争で優勢だったのはその科学側だったのよ。科学的にもそっちのグループの方が技術力は上だったから。——でも、そんな時に」

「俺が魔術を復活させてしまった——って訳か」

「そういう事に……なる、のかな」

「という事は……お前は、その魔術側の人間、という事になるのか」
しかし、俺のその問いかけにウリアは意外にも首を横に振った。

「えっ……それじゃあ、お前は科学側の人間なのか？」

「うっん、それも違う……ていうか、まあ、私はどちらかと言えば魔術側の人間だけど、私はどちら側の意思でも動いていないの」

「私を動かしているのは」とウリアは俺を微笑と共に見つめて言った。

「あなた——2056年の秀よ」

「……未来の、俺？」

「私は、未来の秀に頼まれて、2056年から過去の秀——つまり、現代のあなたを護る為に過去にやってきたの」

「……そう、だったのか」

俺はそう呟くと既にもう完璧に伸び切ってしまつて——食べられない事は無いのだが、色々と手遅れなカレーのカップラーメンを床に置くとベッドから立ち上がる。

そして、机の引き出しの中から“それ”を——白い宝石のような何かの欠片を取り出した。

「これが……遠い未来、魔術を復活させる鍵になるのか」

「そうらしいわね。私は初めて見たけれど」

「えっ？」

俺はそのウリアの発言に少し疑問を持った。

「初めて見たって……未来の俺はウリアにこれを見せなかったのか？」

「見せる以前に……私と未来の秀があつたのは、ほんの一瞬だけだから」

「……お前、よくそれで俺の為に過去までやって来れたよな」

「わ、私にも色々あるのよ、色々ね！」

どんな色々があればそこまで知らない赤の他人の為にこんな過去までやって来れると言うんだ。

ていうか、もしもそれが本当なら、意外とこいつ心が寛容なのかも知れなかった。

意外と、だが。

ここ重要ね。

「……ていうか、少し皮肉な話してもいいか、ウリア」

「……皮肉な話？」

「ちょっと考えたんだけど……今のお前の話が本当ならさ」

「それって」と俺は自嘲めいた笑みと共にその欠片を見下ろして言う。

「ここで俺とこの欠片がこの世から消えれば——そんな残酷な未来は訪れないんじゃないか？」

「……はあ」

ため息をつかれた。

ウリアから呆れられたようにため息をつかれた。

あれ、どうしてだろう。今の俺結構真剣な雰囲気と口調で言っただけなのに。

「オイ、ため息をつくとは一体全体どういう事だ」

「やっぱり……秀は秀、よね」

「あ？」

「未来の——2056年の秀が言っていたのよ。2011年の俺は自己犠牲的な事を言うかも知れないけど見捨てないでやってくれ、ってね」

「……………」

……流石は俺。

当たり前だが、45年経つてもどうやら俺は俺のようだった。

俺の事をよく熟知していらっしやる。

まあ、他でも無い俺自身の事だから、それは当たり前なのだろうけど。

上級魔術師？

「……そして、未来の秀からは、もう一つだけ伝言があるの」

「……何だ？」

「世界を救って欲しい、だって」

「……………」

「この世界の俺には無理だったけど、45年前の俺なら——世界を救い、未来を変えられるはずだって」

「……………」

そのウリアの言葉に——正確には、未来の俺からの伝言に俺は再度嘲笑する。

オイオイオイオイオイ。

未来の俺……何を言い出すかと思えば。

お前が俺なら、俺の事をちゃんと解っているはずだろう？

俺は単なる平凡な一般人だ。

そこら辺を適当に歩けば幾らでも居るような。

映画やドラマで映像の端から端を歩いて消えて行くエキストラみた

いな。

俺の人生においての立ち位置は——そんなものなんだよ。

それなのに——何だって？

世界を救え、だって？

馬鹿げている——ウリアの作り話も、全てが馬鹿げている。

ていうか、それ以前にウリアが今語った話は全て出鱈目^{でたらめ}なのだ。

出鱈目で、単なる設定で、妄想で、想像で、幻想で——作り話。

平たく言えば、嘘だ。

そんな作り話に登場した未来の俺からの伝言に頭を悩ませるなんて——。

それこそ、馬鹿げているではないか。

「……今話した全ての事を、今ここで信じてくれとは言わないわ」

「でもね、秀」とウリアは言う。

「あなたには、どうせこの先、嫌でも今の話を信じなければならなくなる時が来るから……事前に、私がここにやってきた事情だけでも話しておきたかったの」

「ああ……お気遣いありがとな、ウリア。……でも」

……でも。

どんなに気を遣われたって、どんな事情を聞いていたって。

俺は……俺には。

「俺には……世界を救うなんて、未来を変えるなんて、そんな大それた役目を担うだけの器は無いぜ？ 精々、受け止められるのは今の自分の人生くらいだからな。世界がどうか、未来がどうか言う前に、俺は今生きている人生を生き抜くだけでも精一杯なんだから」

「……そうね、そうかもしれない」

「けれど」と。

ウリアは椅子から立ち上がると——俺の前に移動してきて笑みを見せる。

その笑みは理屈も無く心が何だか落ち着くような——そんな笑顔で。

「だからこそ……私が、秀が受け止めきれないものを代わりに受け止める為に、未来からやってきたのよ？」

「……ウリア——」

俺がウリアの名前を呟いた時だった。

不意に、ウリアが何かの気配を察知したように急に目の色を変えて

ベランダに通じる大窓を——その向こう側に広がる景色を振り返った。

外にはいつの間にか夜の帳とけつが下りていた。

まあ、夕飯を食べ始めた時点で既に時刻は午後8時を回っていたから——それは当然の事だろう。

「……オイ、ウリア、どうかしたのか？」

「……秀」

「ちょっと来て」と俺はウリアから手を掴まされると引っ張られる形でベランダへと強制的に出された。

「オイ…… 本当にどうしたんだよ」

俺はウリアに問いかける——しかし、ウリアは何も無い夜空しきを頻りに見渡していて俺の問いかけには何も答えない。

本当に何があっただ……。

俺がうんざりした心境と共に心の内でそんな事を呟いた時だった。

不意に——本当に何の前触れも、音も、相図も無く。

俺の手の中で——その欠片が白く発光したのだ。

魔導獣機

「な、何だよ、これ……！」

突如、俺の持つペンの形状をした欠片から放たれた白い光に――流石に恐怖はしなかったが、純粹に俺は驚いた。

しかし、俺の隣に居るウリアはどこと無く冷静な口調で。

「やつぱり……！」

納得したように呟いて――再度夜空を振り仰いだ。

俺も訳の解らないままウリアに続いて夜空を見上げる。

今夜は雲一つない快晴だった。

いや、夜なので快晴という言葉が正しいのかどうか解らないが――とりあえず、雲一つない、満天の星と綺麗な月の拝める申し分無い夜空だった。

――そして。

そんな夜空が――景色が不意に“歪んだ”。

「えっ……」

無論、歪み始めた景色に啞然とした声を上げたのは俺だ。

歪みを帯びた景色は更に歪みを重ねて、捻れて渦を巻き――。

最終的に夜空よりも黒い漆黒の穴を創造した。

「……来る」

そして、俺は漆黒の穴を仰いだままそう呟いたウリアの声を聞き逃さなかった。

「えっ、来るって、一体何がだよ」

俺のその問いかけにウリアは勇敢にも――いや、勇敢とは呼べないかも知れないが――その場で跳び上がってベランダの手摺の上に着地した。

「秀！ 掴まって！」

俺はウリアから差し出された手を言われるがままに掴む。

すると、信じられない話だがウリアは俺の体を片腕で軽々と持ち上げた。

それが魔術の力なのか――それとも手首の辺りに装着されている機械の仕業なのか。

それは解らなかったが。

とにかく、ウリアは俺の体をまるで発泡スチロールのように軽々と持ち上げるとそのまま自身の体に押し付けるようにして抱き締めた。

「オ、オイ、ちょっ、お前……！」

まあ、そのウリアの行動によって俺の顔は必然的にライダースーツのようなぴっちりとした服装によって強調されたウリアの谷間に埋まる訳で。

ていうか、こいつ意外と胸大きいんだな。

スーツで強調されているからだろうか。

下手すると霧歌クラスのバストを持ち合わせているのかもしれない。

霧歌もアレで意外と大きいからなあ――。

「秀！」

「は、ハイッ！」

不意にウリアから名前を呼ばれた俺は邪な想像がウリアに伝達してしまったのかと焦って思わず裏返った声を発してしまった。

「この近くに、どこか……えっと、広い場所はある！？」

「何だよ、いきなり！　っーか、何そのアバウトな質問は！」

「いいから！　どこでもいいから答えて！　出来るだけ人が居ない所！」

「そ、それなら……確か、近くに海岸があつたはずだ！」

「海岸——海の事ね、解った！」

どうして、ウリアが今そんな質問を俺にしてきたのか。

そんな疑問を考える余裕も無く——次の現象が起こった。

何と、ウリアの足元に赤く光るいわゆる“魔方陣”のようなものが出現したからだ。

そして、きっとその魔方陣の効力なのだろう。

次の瞬間、ウリアの背中から深紅の炎の翼が生えて来た。

「ウリア……お前……！」

「しっかり掴まってね、秀！」

ウリアはその炎の翼を使ってベランダから空中へと飛び上がる。

それから、俺を抱えたウリアが屋根よりも高い位置に辿り着いた所で。

俺は——見た。

夜空に空いた漆黒の穴から出て来る——その“巨大な生物”を。

しかし、俺はその謎の生物の姿をハッキリと捉える事は出来なかった。

何故なら、その時には既にウリアが“飛行”を始めていたからだ。

一口に飛行とは言っても、ハングライダーとかパラグライダーとかそんな娯楽的なものでは決して無かった。

飛行中——周囲の景色が“歪んで見えた”。

それほどの速度で俺達は飛んだという事なのだろう。

人間の体は音速には耐え切れないという説があったような気もするが——俺の体は大丈夫なのだろうか？

しかし、そんな心配は無用だったようで。

俺がそんな疑問を感じ始めた頃には俺達は海岸の上空へと到着していた。

ウリアは深紅の炎の翼を羽ばたかせ——段々と降下していき、俺を砂浜の上に下ろした。

俺の顔がウリアの胸の谷間から離れる。

正直、もう少しあのまま飛行を続けていたかった——とは決して言わない。

広い場所と言われてハワイ沖を指定すれば良かったとも決して思っていないから。

変な下心は無いから。だって俺は紳士だもの。

ジェントルマンだもの。

「……大丈夫、心配しないで、秀」

そして、ウリアはそう言いながら——砂浜に俺を残して一人ゆっくりと上昇を開始した。

炎の翼を携えて夜空へと吸い込まれるようにして昇って行くウリアの姿は。

「私が……秀の事を、護るから」

まるで——天使のように思えた。

魔導獣機？

しかし、俺はそんな錯覚——と言うよりも、幻覚から一気に解き放たれる。

ウリアが飛んでいる高度よりも遙か上空を猛スピードで巨大な“何か”が飛び去った。

その巨大な“何か”は海上で旋回するとまたこちらに戻って来た。

かなりの速度で飛行しているのだろう——その巨大な“何か”が通った後、少し遅れて海面がまるで爆発したかのように水飛沫を上げた。

そして、その巨大な“何か”は俺とウリアの目の前で急停止する。

その巨大な“何か”に纏わり付いていたのだろう——それが停止した瞬間、凄まじい突風がこちらに向かって襲い掛かってきた。

舞い上がる砂塵——俺は目を瞑ると同時に片腕を文字通り目の前に持ってきて来た。

段々と消滅していく砂塵。

完全にそれが消えた頃を見計らって俺は目を開けると——上空に佇んでいる“それ”を仰いだ。

“それ”の体は——“その生物”の体は全てが金属で構成されているようだった。

月明かりを反射している所を見るとおそらくはそうなのだろう。

そして——俺の予想では“その生物”は“機械”だ。

それならば、それは“生物”ではなく“機械”じゃないか——そう思うかもしれない。

だが、実際目の当たりにするとその見解はやはり“生物”に落ち着くだろう。

その“機械”染みた“生物”は——途轍もなく巨大な鳥の形をしていたのだから。

動きもかなりリアル——まるで、“本物の鳥のように”動いている。

空中で停止しておく為に一定の間隔で羽ばたく灰色の鉄製の翼。

同じく鉄製の尾も翼が動くリズムに合わせて左右に揺れている。

ライトでも仕込んであるのだろうか——本来、目が有るべき場所では黄色い光があった。

「……私が相手よ」

そう言つて、ウリアはその鉄製の鳥の顔と同じ高さまで飛翔する。

「秀には……指一本触れさせない」

そして——そのウリアの挑発に対抗するように。

その鉄製の鳥は——鳴いた。

鳴いたとは言っても、凄まじいノイズを放っただけなのだが。

思わず耳を押さえなくなるようなそんなけたたましいノイズを。

その空間をも歪ましてしまいそうなノイズが解き放たれた瞬間、ウリアは凄まじい速度で海上へと移動し始めた。

その動きを目で——正確には黄色いライトで追う鉄製の鳥。

海上の上空に辿り着いたウリアは停止して鉄製の鳥と向き合う。

——その直後だった。

不意に鉄製の鳥がその巨大な口を開けて——そして。

どこからとも無く一瞬で集約させた光の束を凝縮させた光の弾をウリア目掛けて解き放った。

しかし、挑発するだけあってウリアもその弾に易々と当たるつもりは毛頭も無いらしい。

ウリアは光速で——冗談抜きで光の速度で迫ってきたその弾をいとも容易く躲す。

標的を失った光の弾は水平線上の彼方まで飛んで行き——。

海の果てで大爆発を起こした。

海の果てが一瞬だけ昼間になった——それほどの光が遙か水平線上の彼方で解き放たれたのだ。

そして、その光よりもワントンポ遅れて台風の時でもここまで酷くは無いと思える突風が俺の立っている砂浜を襲った。

あれほどの距離からここまでの威力の風が吹き荒れるくらいである。

あの爆発の衝撃で津波が押し寄せて来る可能性もありそうだ。

それから、俺はウリアと鉄製の鳥との戦闘へと視線を向ける。

しかし、向けられたのは視線だけで実際には速過ぎて殆ど視界に捉える事は出来なかった。

時折、どちらかが更なる加速をする為に空中で一旦停止するくらいで。

それ以外はウリアも鉄製の鳥も、俺はその姿を捉える事すら出来なかったのである。

どちらが優勢なのだろう。

俺がそんな事を思った時——光速の戦闘が繰り広げられている上空で何かオレンジ色の光が一瞬だけ光った。

——そして。

おそらく、あの鉄製の鳥の片翼と思われる鉄の塊が砂浜に落下して

きた。

「ちよっ…………うおおおおおっ!？」

俺は間一髪、砂浜に飛び込む形で落下してきたその巨大な翼を避け切る事が出来た。

「あ、危ねえ…………死ぬかと、思った…………!」

ていうか…………うん、俺を助けてくれるのは物凄く嬉しいのだけれど。

ウリア、翼を落とす場所をもっ少し考えて下さい、マジで。

そんな地味に九死に一生を得た俺はそれを教訓に砂浜の端の方へと急いで移動する。

そして、その俺の行動はどうやら正解だったらしく。

俺が移動した直後にすぐさまもっ片方の鉄の翼が落下してきた。

その翼も轟音を発しながら落下した際に地震並みの揺れを大地に齎した。

「……………」

ていうか、両方の翼を^もがれてしまったら流石に飛べないのではな
いか。

俺がそんな素朴な疑問と共に夜空を見上げた瞬間——本当にその瞬
間。

今度は本体が砂浜に落下してきた。

それと共に翼とは比べものにならないほどの轟音と、揺れと、砂塵が俺に襲い掛かる。

舞い上がった砂塵の向こう側に――俺はオレンジ色の光を捉えた。

そして、その砂塵が晴れて行く中で俺はその光の正体が鉄製の鳥の本体の上に仁王立ちするウリアが持つ炎の剣だと気付く。

ウリアはその炎の剣の切先を鉄製の鳥に向けたまま――最期にこう言った。

「――バイバイ」

ウリアが相手へと贈ったその言葉は単なる別れの挨拶だったのか、それとも単なる皮肉の言葉だったのか。

――何にせよ。

ウリアはそう言って炎の剣を鉄製の鳥の胸に深々と突き刺した。

魔導獣機？

断末魔めいた凄まじいノイズをその口から発する鉄製の鳥。

すると、どういう理屈か、鉄製の鳥のその全てが一瞬にして劫火に呑まれた。

鉄製の鳥の顔も、胴体も、尾も、？がれた翼でさえも。

その全てが——一瞬にして炎に包まれて。

消失——いや、焼失、した。

跡に残ったのは深紅の炎の翼を背に生やしたウリアだけだった。

——それは一瞬の戦いだった。

呆気無いとも言って良い。

けれど——俺にとって、ウリアにとって今の戦闘は命を懸けた戦闘なのだ。

その戦いに何か“別のもの”を求める方が間違っているのだろう。

俺がそんな事を思っているとウリアがこちらに歩いて来るのが見えた。

ウリアの手に握られていたオレンジ色の光を放つ炎の剣はこちらに向かって来る途中にただの炎となって空中に霧散した。

そして、俺の前にやってきたウリアは得意気な笑みと共に腕組みをしてこう言った。

「……何か言う事は？」

……そんなもの。

お前に今言つべき事なんて一つしか無い。

「……お前って、意外と胸デカいんだな」

「キーツクツ！」

「痛つてえ！」

ウリアから蹴られた。

また脇腹を今度は全力で蹴られた。

ていうか、威力が強過ぎて俺はそのまま砂浜の彼方まで吹き飛ばされた。

「ぐ、ぐふっ……！」

俺は蹴られた脇腹の辺りを押さえながらその場に立ち上がる。

つか、俺の脇腹ちゃんとご健在だよね？

蹴られた衝撃で抉^{えぐ}られていないよね？

「秀——っ！」

すると、50メートルほど向こうから怒りに満ち溢れたウリアの聲が飛んできた。

「こっちは決死の覚悟で秀の為に戦ったのに、戦闘後に私に掛ける言葉が私の胸の感想って一体全体どういう見なのよ——っ！」

「スマン！ お礼を言うべき場面はあそこだと思ったんだよ！」

「この変態！ バーカ！ 秀みたいな変態はもうここから歩いて帰ればいいのよ！」

「えっ——あつ、オイ！ ちょっと待て！ ウリア！」

俺の呼び止める声も空しく——夜空の彼方へと消えて行く深紅の光。

つか、ウリアの奴、マジで俺だけ置いて帰りやがった……。

「……口は災いの元、か」

今度から真剣な場面ではボケないようにしよう。

俺は先人達が遺してくれたその言葉の意味を噛み締めながら、自宅へと何とか辿り着く為に歩き出す。

ちなみに、この後俺はちゃんと家に帰り着く事になるのだが……。

5時間くらい掛かった。

マジで足が棒になるかと思った。

翌朝——俺は携帯の画面に表示された『13:12』という時間に驚愕してベッドから跳び上がるように起床した。

「遅刻——ってああ、何だ、そう言えば今日から夏休みか」

7月28日。

“昨日の事”で——何かもう日付が1週間くらい過ぎてしまっているような気がする。

偶然拾った宝石のような白い何かの欠片。

突然この家を訪れた金髪碧眼のツインテールの少女。

その少女から聞かされたとんでもない未来の話。

突如、俺の前に現れた機械の怪物。

そして、それをいとも容易く——容易過ぎるほどにあっさりと倒して見せたウリア。

「昨日の事が全て……夢だったらいいんだろうけど」

そう言いながら、俺は何故かベッドの傍でうつ伏せに行き倒れている少女――ウリアを見下ろして現実逃避すら不可能な事に気付いた。

「……オーイ、その金髪の少女」

「……何よ、秀」

「お前、特徴の一つであるツインテールはどうした」

「それよりも今は聞くべき事があるでしょーが！」

ガバツと昨日の戦闘ではないが光の速度で起き上がったウリアは涙目で俺の眼前まで顔を近付けてきた。

「どうして！ 私が！ ここで！ 行き倒れて！ いるのかとか！」

「いや、それも気になったんだけどさ。それよりも俺はお前の髪型の方が気になったから」

「部屋の中でまでツインテールはしなくていいって思ったのよ！ ほら私は秀の質問に答えたわ！ だから昨日の“しーふーどー”を出しなさいよ！」

「待て、その等価交換はおかしいだろ」

ていうか、まず等価交換すら成立していない。

「解ったよ……とりあえず、腹が減ったって事で良いんだよね？」

「当たり前よ……だって秀、何か昼まで起きないんだもん、死んじ

やったのかと思っただわ」

「俺を勝手に殺すんじゃない」

「だって秀、私がこんなにお腹空いてるのに昼まで起きないんだもん、殺してやろうかと思っただわ」

「さっきとは別の意味で俺を勝手に殺すんじゃない」

魔導獣機？

ていうか、お前って立場的に俺のボディガードなんだよな？

それで度々俺に対して殺人予告をするってどうなんだよ。

「ウリア」

「何よ、下僕——あつ、間違えた、秀」

「何をどうしたら俺の名前と下僕と間違えるのか聞いてみたいものだな。ええ？」

「いや、今の状態じゃないのよ？ 偶々、秀の事を“下僕”って呼ばうとしたらそう呼んでしまっただけの事で」

「要するに意図的に呼んだって事じゃねーか！」

「ちっ、バレたか。馬鹿な秀には解らないと思って言ったのに」

「解るわ！ 流石に無知な俺でもそれくらいは解るよ！」

ていうか、そこまで俺は馬鹿じゃないから！

「全く……ほら、付いて来いよ」

「私に命令しないで」

「シーフード欲しくないのか？」

「あなたに付いて行きます、どこまでも」

「……………」

従順なのか否か——よく解らない奴である。

ていうか、こいつはただ単に欲望に忠実なだけなのかも知れない。

要約すると単なる馬鹿だ。

……俺も人の事は言えないけれど。

一階に下りて、台所に辿り着いた俺はシーフードのカップラーメンが切れている事に気付く。

本来、俺が日々を生き抜く為に必要なカップラーメンの数々はキッチンの一角に山積みしているのだが——。

「……アレ、無いな、シーフード」

「え————っ!？」

「うるさいぞ、ウリア。こんな事で絶望染みた声を上げるな」

「私には死活問題なのよ。地球温暖化で南極の氷が解けるみたいな」

「お前の問題を世界レベルの問題と同列に考えるな」

「仕方ないわねえ……それじゃあ、こうしましょう、秀」

「どうするんだ？ 別のヤツにするか？」

「今から急いで“シーフード”を買って来てよ」

「ふざけるな。昼飯どころか夕飯も抜きにするぞ、お前」

とりあえず、俺はカレーと——シーフードはやはり探しても見付からなかったので、スタンダードスタイルの味のカップラーメンをウリア用に作る事にした。

そのスタンダードスタイルのカップラーメンのパッケージを見たウリアは——。

「ねえ、秀。これ何か“シーフード”みたいに何味が書いてないんだけど。まさか、これって味の無いヤツなの？」

とか何とか余りにも馬鹿げた発言をしていたので俺は無視してラーメン作りに取り掛かる事にした。

まあ、ラーメン作りとは言っても単にお湯を注いで三分待つだけなのだが。

「しかし、このカップラーメンを世に生み出してくれた人は本当に天才だな」

「そうね。秀の方は甜菜^{てんさい}って感じだけど」

「俺を北海道を中心として栽培されている野菜と一緒にするな」

「だって、秀の顔って甜菜っぽい形してるじゃない」

「止めろ！勝手に俺の容姿について変な情報を語るな！ただでさえ俺は自分の容姿についてここでは語っていないんだから！」

「それじゃあ、私が説明するわね。何と言つか……秀は人の首から甜菜が生えた感じの容姿をしています」

「ただの化物じゃねーか！」

「頭からは髪の毛の代わりに甜菜の葉が生えています」

「黙れ！誰が上手い事を言えと言った！」

いや、実際問題そこまで上手くは無いのだが。

そして、俺がウリアとそんな遣り取りとしている内に三分が経過してカップラーメンが完成した。

俺は二つのカップラーメンを両手にリビングへと向かい——何と云うか、久しぶりに使う食卓、もとい、テーブルの上にそれらを置いた。

俺は四つある椅子の内の一つに腰を下ろす。

ウリアは俺の正面の椅子に座って——。

「いったただつきまーす！」

——すぐさまその声を上げるとフォークを引っ掴んでカップラーメンを食べ始めた。

それほどお腹が減っていたという事だろうか……まあ、部屋の中で行き倒れるくらいだしな。

「ていうか、一つ思ったんだけどさ——」

「何、秀、それ食べないの？」

「……いや、食べるけど。俺が言いたいのはそういう事じゃなくて」

俺はカップラーメンの蓋を開けながら言う。

「その食事前の挨拶——って言っているのかな。それって、2056年の未来でも皆普通に使っているものなのか」

「モグモグ……世界中のそういう挨拶とか言葉は変わっていないわ。私の場合は知識として日本の言葉とか挨拶とか色々なものを知っているから、それを使っているだけよ」

「ああ……お前、そう言えば日本語かなり達者だもんな」

「でしょう？」

「でもお前、言葉が達者な割には箸を使えないんだな」

「あー、 “ しーふーどー ” じゃないけどこっちも意外と美味しいわねー」

「……………」

ごまか
誤魔化しやがった。

白々し過ぎるだろ。絶対誤魔化すの下手だよ、こいつ。

魔導獣機？

「まあ、いいや……いただきます」

「ていうか、秀……未来の事を聞いて来るって事は、私の話を信じるつもりになったの？」

「当たり前だろ……ていうか」

俺の脳裏に浮かび上がる“昨日の出来事”――。

「……あんなものを見せられちゃ、信じるしかないだろ」

人間は見た事が無いものを絶対に信じない代わりに――“見てしまったもの”に対しては否が応でも信じてしまう生き物なのだから。

「ていうか、昨日のアレは一体なんだ。あの機械の鳥は何なんだよ」

「『メカニカルビーストタイプ・ファウル
魔導獣機 大鳥型』よ」

「だから、昨日も言ったけど、急に専門用語を出されても解らないって」

「単にこういう名称は英単語を繋げているだけなんだけど……ああ、そっか、秀って馬鹿だもんねー。英語とかも解らないかー」

「……カップラーメンを没収する」

「やだ！ このカップラーメンだけは絶対に譲らないから！」

俺が伸ばした手から容器を持ち上げる事でスタンダードのカップラーメンを頭上に避難させるウリア。

「全くもう……解ったわよ。良心的な私が豆粒並みの脳味噌しか持ち合わせていない秀に解るように説明して上げる」

「それは有り難いんだけど、俺の脳味噌の事を悪く語っている時点で“良心的”って言葉は間違っていると俺は思うぞ？」

「『メカニカル』、『ビースト』——つまりは、“機械的な獣”の事で、『タイプ』、『ファウル』——こっちはつまり、“鳥の形”って事よ」

「ああ、なるほどね……。ウリア、お前って精神的にはかなり子供だけど、頭脳的にはかなり大人なんじゃないか？」

「殴るわよ、秀」

「何だ、高校生時代に変な薬でも飲まされたか？」

「だから殴るわよって！ ていうか、それはどういう意味よ！」

そんな時だった。

テーブルの上の俺の携帯が震えたのは。

「電話……霧歌から？」

「もしもし？」と俺はラーメンを食べる手を一旦休めて霧歌からの

電話に出た。

（あつ、秀ちゃん？ ゴメンね、昨日はメールできなくて）

「ああ、良いよ、別に。お前の事だから、どうせ塾とか習い事とか、その辺の事で忙しかったんだろ？」

（うん、そうなの……ゴメンね？）

「だから、別に良いって。お前はお前で、俺には俺の日常があるんだからさ。お前の都合を俺に合わせる義務なんか無いんだし」

（でも、私的には何か秀ちゃんにお詫びがしたいなあ、って思っている訳なのよ）

「お詫びって……だから、別に良いって。そう言うのは」

（何でも良いから、何でも良いから私に何かお詫びをさせてよ。そうしないと、私死んじゃう）

「お前はお詫びをしないと死んでしまう病気にでも掛かっているのか」

（だから、ね？ お願い）

「……解ったよ。それで、具体的には何をしてくれるんだ？」

（秀ちゃんは、何か今私にして欲しい事は無い？）

「霧歌にして欲しい事……そうだな、メイドコスで1日だけ俺のメ

イドに――」

（却下）

「……それじゃあ、もう、お前が考えていいよ」

（ていうか、それ以外に私にして貰いたい事が無かったんだね……逆にショックと言うか、安心したと言うか、何と言うか）

携帯電話の向こう側で霧歌は俺に対して呆れているようだった。

まあ……当たり前だろうけど。

（うーん、そうだなあ……私が秀ちゃんに出来る事……）

「……………」

何やら、霧歌が無言で考え始めたようなので、俺は霧歌が次に喋り始めるまでの繋ぎにカップラーメンの容器を持ち上げるとそれを口に傾けてスープを飲んで――。

（解った！ それじゃあ、今から秀ちゃんの家に行く！）

「ブ――――ッ！」

俺は口に含んでいたカレーのスープを盛大に前方へと吹き出した。

あれ？

ていうか、何かデジャヴじゃね？

昨日もこんな事があつたような――。

そんな事を思っていたら、俺は正面でカレー^{まみ}塗れになっているウリアに気付いた。

誰のせいであんなったのだろう――またそんな事を思っていたら、ウリアがこちらを鋭い視線で睨んで来たので、俺の現実逃避は崩壊した。

間違いない、俺のせいだ。

俺のせいで全身カレー塗れになったウリアは怒りに体を打ち奮わせている。

（秀ちゃん？ どうしたの？ 大丈夫？）

携帯電話の向こう側からは何やら俺を心配している霧歌の声が頻りに聞こえて来た。

しかし、今の俺にはその声に対してリアクションを取る余裕などなく――。

「何をして……くれるのよこのバカ――ッ！」

そう家の外まで響き渡りそんな怒声と共にウリアが投げてきたスタンダードのカップラーメンを俺は顔面で受けた。

「ふぐつ!？」

(河豚^{ふぐ}？)

「っていうか、あつつつ！」

(えっ？ 河豚が熱いの？ ていうか、秀ちゃん、こんなお昼から河豚食べてるの？)

「いや、違う！ そういう訳じゃない！」

俺はとりあえず霧歌に向かってツツコミを入れながらこちらも全身ラーメンのスープ塗れになった体をどうしようかと椅子から立ち上がる。

俺の前では同じくウリアも「あーもうベタベタ〜」と髪やスーツに付着したカレーに心底嫌そうな声を漏らしていた。

.....。

何かエロかった。

魔導獣機？

「て、ていうか、あの霧歌。今ちよつと緊急事態に陥ったからさ、とりあえず今は電話切ってもいいか？」

（緊急事態？ 大丈夫なの、本当に？）

「ああ、大丈夫だから。ちよつと今は切らせて貰うな！ それじゃあ！」

（あつ、ちよつと秀ちゃ——）

俺はその霧歌の返事を待たずしてその通話を切った。

その直後、空かさず俺にウリアの怒声が飛んでくる。

「ちよつと！ 本当に何をしてるのよ！ どうして急にラーメンを吹き出したりしたのよ！」

「いや、だって霧歌が——俺の友達が家に来るなんて言うから」

「友達が家に来る事の何が駄目なのよ」

「いや、別に駄目では無いんだけど……ほら、だって、今はお前が居るだろ？」

「……私が居たら何か駄目なの？」

カレー塗れのウリアはそう言って小首を傾げた。

どうやら、本当に解っていない様子だ。

本当にこいつは……肝心な所で馬鹿なんだから。

まあ、カレー塗れなのは何か興奮するし？　今の小首を傾げた動作も何か可愛かった——いや、何でも無い。

「……だからな？　普段は一人暮らししている俺の家に、お前のような俺と同世代の女の子が居たら何かと誤解を受けるだろ？」

「良いじゃない、説明して上げれば。昨日から俺の家に居候する事になったウリアです、昨日はこいつと一緒に一晩過ごしました——
つて」

「お前の言い回しに悪意を感じざるを得ないんだが！　つか、お前は俺を社会的に抹殺するつもりか！——」

「私は秀の事を身体的には護るけれど、秀の事を“社会的”に護るつもりは毛頭ないわ」

「何爆弾発言を言っちゃってるんだよ！」

「ていうか、秀。何か体がベタベタするんだけど……どうしたらいい？」

「そうだな。俺が今からタオルを持って来るから、俺がお前の体の隅々を吹いて——」

「秀、社会的にも身体的にも今すぐここで殺して上げましょうか？」

「スマン、冗談だ。だから怒るな」

……本気の殺意が込められた視線を初めて受けたような気がした。

「仕方ない……それじゃあ、風呂使えよ。風呂は流石に2056年にもあるよな？」

「あるに決まっているでしょ。お風呂はどこにあるの？」

「その扉からリビングを出たら玄関前に出るから、左に曲がれば風呂場に繋がる扉がある」

「そつか、りょーかい」

「あつ、それと、お湯は入れてもいいが、入るならシャワーでカレーを洗い流してから入れよ」

「解ってるって、私、これでもかなりの常識人なのよ？」

常識人は日常的に相手に殺人予告などはしない。

そうツッコミを入れようと思ったが——あいつをカレー塗れにしたのは俺なのであえて言わない事にした。

つか、魔術を使える時点で常識人とは掛け離れているような気がする。

「……………」

そこで、俺は昨日ウリアが使っていた魔術の数々を思い出す。

背中から出現した深紅に光る炎の翼——オレンジ色に光る炎の剣。

「……魔術、か」

ウリアはその魔術を駆使して昨日の怪物をいとも簡単に薙ぎ倒した。

——つまり、魔術は“兵器的”にそこまで強力という事だ。

そして、俺が——今ここに立っている俺が今から19年後にその魔術を世界に復活させる。

余りにも理解し難い話だった。

余りにも現実的ではない話だった。

しかし、それは当たり前前の事で。

今から“起こる事になっている”未来の事を——現実的に理解しようとしても無駄な事だ。

蛇足——と言うのが正しいか。

だって、本来ならば。

未来というのは——何が起こるか解らないものなのだから。

「……………」

ウリアが風呂に入りに行ってから——1時間近くが経過していた。

つか、遅いよ。

あいつ、まさか箸の時と同じで実は風呂の使い方を知らなかった——とか、そんなオチを用意しているんじゃないだろうな。

ちなみに、俺はウリアから被せられたラーメンのスープを浴びた後の格好のままで居る。

洋服を着替えばいい話なのだが——何と云うか、どうせ風呂に入るのなら着替えるのはその後も良いと思ったのだ。

洗濯機も風呂場の脱衣所にしか置いていないから。

万が一、着替え途中のウリアと鉢合わせしてしまったら、社会的には未だしも身体的に本当に殺されかねない。

……それにしても。

「遅い、遅過ぎる……………」

流石の俺も業を煮やしていた——ていうか、何度も言っけど流石に遅過ぎだって。

「……………まさか」

まさか——湯船で溺れているとか、そんな事は無いだろうな。

いや、流石にウリアでもそんな事は有り得ないだろう。

いや、でも、万が一、しかし——。

「……………はあ」

俺はため息をつくと立ち上がる。

いや、これはウリアの事が心配なだけだから。

万が一、ウリアが溺れているなんて事態になっていたら——なあ？

だから、これはただ単にウリアが心配なだけだから。

別にあわよくばウリアの着替えシーンを覗く事が出来るなんてそんな下心は全くないから。

皆無だから。

そんな言葉を自分自身に言い聞かせながら俺は脱衣所へと繋がる扉の前に立った。

「……………」

俺は無言で扉を二回ほどノックしてみる。

しかし、ウリアからの返事は無い。

「おい、ウリアー？」

今度はノックに加えて中に居るはずのウリアに向かって呼び掛けてみた。

しかし、またもや返事は無い。

「……………」

リアルに心配になってきた俺は恐る恐る扉を少しだけ開けてみる。

魔導獣機？

脱衣所の中にウリアの姿は無かった。

「……………あれ？」

疑問に思った俺は脱衣所に足を踏み入れる。

本来、脱いだ洋服を入れている銭湯に置いてあるような脱衣籠の中にはウリアの洋服も、下着も、何も入れられていなかった。

「……………」

別に、ウリアの下着が入っていなかった事に若干俺は残念に思っ
てなんかいない。

むしろ、安心できた。

脱衣籠の中に衣類が入っていないという事は、ウリアは既に風呂から上がったという事なのだろう。

「全く、上がったなら上がったで一声掛けろよ……………つか、風呂の電気も点けっぱなしだし」

曇りガラスが嵌め込まれた風呂場へと繋がる扉の向こう側には電気が灯っていた。

今はエコがどうか騒がれている時代なのだが——魔術が復活した時代にはその辺りの思考も無くなってしまふのだろうか。

まあ、魔術さえ使えれば大概生活には困らないような気がする。

火を生み出す事が出来ればガス代掛からないし、水を生み出す事が出来れば水道代掛からないし、雷を生み出す事が出来れば電気代要らないからな。

「……………ん？」

そこで、俺は脱衣籠の中にウリアが肩や腰、手首などの様々な箇所
に装着していた防具や機械などが入っている事に気付いた。

「何だ、あいつ、忘れて行ったのか……………やっぱり、こういう所は抜
けてるんだな」

そう言いながら俺は洋服を全て脱ぎ終えると風呂場へと繋がる扉を
押し開ける。

そして、俺は一糸纏^{まと}わぬ姿のウリアと“対面”した。

「……………」

「……………」

互いに向き合ったまま言葉を失い——互いの姿を呆然と見据える俺
とウリア。

しかし、俺も思春期真っ盛りの平凡な男子高校生である。

別に変な下心は無かったのだが——俺の視線はウリアの顔から首よ

りも下の方へと勝手に移動し初めて。

「キャ——ッ！」

またもや、カレーの時の怒声と同じく家の外まで伝わってしまいそんな悲鳴を上げたウリアは俺の体突き飛ばした。

「おっ、おお!？」

不意な出来事だったので、俺はバランスを取る事が精一杯で——風呂場を出て、脱衣所を抜けて、そのまま廊下に尻餅を着いてしまった。

「痛ててて……て？」

そして——気付けば目の前にはバスタオルを身に纏ったウリアの姿が。

「……何か言う事は？」

そこで、俺は今の状況が昨日あの鉄製の怪鳥を倒したシチュエーションとほぼ同じだという事に気付く。

違うのは、俺とウリアが裸で——ウリアの顔に浮かんでいるのは得意気な笑みでは無く、明らかに“殺意”が込められた黒々しい満面の笑みだという事だ。

あっ、ヤバイ、殺される。

俺の中の本能的な部分が周囲のただならぬ雰囲気からそれを察知し

た。

おそらく、何を言っても殺されるだろう——謝罪の言葉を述べたとしても。

……それならば。

ここで言うべき事なんて一つしか無い。

「ウリア……お前の胸、やっぱりあれはスーツで強調されていただけみたいだな」

「死ね——っ！」

ウリアに蹴られた。

しかし、今回蹴られたのは脇腹では無く顔面だった。

正確に言えば側頭部。

本来ならば俺はまた50メートルほど吹き飛ばされていたのかも知れないが——。

魔術的な力が込められていなかったのか、それともウリアの怪力の根源はあのスーツにあるのか。

俺は玄関の辺りまで飛ばされただけでそのまま玄関を突き破って外まで飛び出すような事にはならなかった。

身体的には死ぬ所だったが——そういう意味では俺は社会的には死

なくてラッキーだと思える。

——しかし。

そんなラッキーも長くは続いてくれなかった。

何故なら、玄関扉が開く音が聞こえて来たからだ。

俺は頭だけを動かして玄関の方へと視線を向ける。

そこに立っていた人物に——俺は驚愕して目を見開いた。

「……きり、か……？」

何故か、そこには霧歌が立っていた。

「……………」

霧歌は呆然と頻りに状況を整理しようと視線を至る所に彷徨さまよわせている。

——さて、ここで問題を一つ。

俺の幼馴染、夜華霧歌が俺の家を訪ねた際、彼女は玄関先でこんな光景を捉えました。

一つは、俺、もとい、自分の幼馴染が全裸で玄関先に転がっている光景。

そして、もう一つは廊下の奥では誰か見知らぬ女子が明らかに風呂

上りで——しかも、裸にバスタオル一枚という格好でそこに立っている光景。

——さて。

その二つの光景を合わせた際、霧歌の頭の中に生み出される見解は一体何でしょうか？

「……………」

そして、霧歌の中でその問題に対する見解が出たのだろう。

霧歌は無言で扉を閉めて我が真之乃家の玄関から姿を消した。

「ってちよつと待て！ 待って下さい霧歌さん！ これは誤解なんです！ 俺の話を聞いてくれ！ いや、聞いて下さい！ 霧歌さん！」

俺は玄関に向かって手を延ばす。

しかし、無論そこには霧歌の姿は既に無い訳で。

そんな俺を見兼ねてか——後方でウリアのこんな言葉が俺の耳に届いたのだった。

「……………無様ね」

紅焰天使

7月28日。

僕は幼馴染に裸を見られてしまいました。

しかも、玄関という余り裸で居る事に相応しくない場所で。

だから、僕はもう社会的に抹殺されたのも同然です。

社会的に——死んでしまったも、同然です。

だから、僕は身体的にも死んでしまおうと思います。

お父さん、お母さん。

今まで、こんな変態で馬鹿で脳味噌も空っぽな僕の事を育ててくれてありがとう。

今更ですが、僕はお父さんやお母さんが望んだような——そんな息子になれていたでしょうか。

それだけが気がりです。

それ以外には気がりなんてありません。

最期に、それだけが気がりです。

お父さん、お母さん。

僕を生んでくれてありがとう。

僕を育ててくれてありがとう。

僕に笑顔を見せてくれてありがとう。

僕におもちゃを買ってくれてありがとう。

他にも色々——言い尽くせないけれど、本当にありがとう。

ありがとう、お父さん、お母さん。

——さようなら。

「何書いてんだお前」

何やら俺の部屋の勉強机で一心不乱に何かを書いているウリアの背後に忍び寄り、その書いていた紙を奪い取った。

「……何だ？ これ」

「何言ってるの、遺書に決まってるじゃない」

「誰の？」

「秀の」

「何でお前が俺の遺書を書いてるんだよ。遺書というものは本来その人自身が書くものだろうが」

いや、俺も今書くつもりは毛頭ないけれども。

「だって、今から秀自殺しちゃうんでしょ？」

「俺を勝手に自殺志願者に仕立て上げるな」

「だって、あの幼馴染の人に裸を見られたんだもん……自殺するくらいまで落ち込んで、悩んで、死にたがっているのかと思った」

「確かに落ち込んで、悩みもしたが、死にたいとは思ってねーよ」

「何だぁ……残念」

「オイ、今残念って言ったよな？ 絶対に言ったよな？」

「言っていないわ。残念と思ったのは本当」

「お前は否定したいのかしたくないのかどっちなんだよー！」

「そっかぁ……」とやはり残念そうな声色でウリアは俺の手の遺書（仮）を取る。

「折角書いたのに無駄になっちゃったなあ……」

「お前が勝手に遺書なんて書くからだろうが」

「だって、自殺する際には遺書が必要でしょ？」

「だから自殺なんてしないって言ってるだろうが。ていうか、何度も言っけど、お前って俺の身を護る役目を担ってるんじゃないの？」

「秀が自殺を志願した場合には止めない事になっているの」

「いや、止めるよ！　自殺なんて絶対にしないけどそこは止めてくれよ！」

「私、個人の意見を尊重させようと思っているの」

「確かにそれは良い事だが、今使うべき言葉じゃねえ！」

本当にこいつは俺のボディガードなのだろうか……いや、実際に昨日は俺の事を護ってくれたが。

「……ん？」

と、そこで俺はとある疑問に辿り着く。

「なあ、ウリア」

「何？　自殺するつもりになった？」

「残念ながらそんな思考には辿り着いていない。それから、嬉しそうに目をキラキラと輝かせるな——それと残念そうに顔を伏せるな！」

「……それで、何よ」

「昨日の怪物……あれって、機械なんだよな？」

「そうよ」とウリアは答える。

「正確には——“生きた機械”、とでも言うておこうかしら」

「“生きた機械”？」

「ああいう『魔導獣機』の全ての機体には『AI』——つまり、『人工知能』が搭載されているから」

「ああ、なるほどね——って」

今、何て言った？

「……待て、昨日の化物以外にもその『魔導獣機』とやらは存在するのか？」

「当たり前でしょ。それなら態々『大鳥型』なんて呼び名を付ける訳が無いじゃない」

「ああ、そう言われてみれば、そうだな」

「多分だけど——今夜辺りにも、また秀の命を狙って別の『魔導獣機』が現れると思う」

「随分と重要な案件をさらりと言ってくれるものだな……。それじ

やあ、あの『魔導獣機』に人工知能が搭載されているって言うのなら、あいつらは勝手に俺の命を狙ってここまでやって来ている——って事なのか？」

「ううん、それは“ちょっとだけ”違うわ」

「言ったでしょ？」とウリアは椅子を回転させて面と向かって俺を見上げてきた。

これは単なる余談で聞き流して貰っても一向に構わないが——上目遣いのウリアは何だか可愛かった。

紅焰天使？

「あいつらはね、人工知能を搭載しているとは言っても単なる“機械”なのよ」

「……………どういう事だ？」

「知っているとは思うけれど、『魔導獣機』は未来の科学が作り出したもの——と、なれば、この世界に『魔導獣機』を呼ぶ為には、勿論、過去と未来の時空を繋ぐ架け橋を作る為の人間が必要になる」

「……………って、事は。お前以外にも誰か未来の人間がこの時代に来ていて、未来から『魔導獣機』を転送——しているって事なのか？」

「そういう事よ」

ウリアは俺の問いに頷いて、続ける。

「だから——そうね、その『魔導獣機』を転送している奴を“消せば”……………一応、今の所は安全になる」

「オイオイ“消せば”って……………また随分と物騒な言い回しをするじゃないか、ウリア」

「解ってる。解ってはいるけれど……………秀？　あなたの方こそ解っているの？」

「……………ああ、解ってるよ」

解っている、つもりだ。

やらなきゃ、やられる。

俺が今立っているのはそんな危ない場所——そう、言っなれば戦場の真っただ中に俺は今立っているのだ。

だから——“そんな事”は解っている。

——だけど。

「でも、それは……その『魔導獣機』を転送している奴を“殺す”なんていうのは」

「……大丈夫。心配しないで」

「秀の手は汚させない」とウリアは椅子から立ち上がってこう言っ
た。

「汚れるのは……私の手だけで十分だから」

「いや、だから……それも違うだろ」

「……秀、お願い」

そして——ウリアは俺にこう懇願してきた。

「今は……今だけは“そういうもの”だって……割り切って、お願いだから」

「……ウリア」

「秀がそうしてくれなきゃ……いつか、私は秀の事を護り切れなくなるかもしれない」

「……………」

間違っている——ウリアの考え方は絶対に間違っている。

俺はそう思う。

——けれど。

今が“そう思ふべき”なのなら——“そう思わざるを得ない”のならば。

……俺は。

「……解ったよ、ウリア」

「うん、ありがとう、秀。……そして、ゴメンね、秀」

「気にするな……お前は俺を護る為に、頑張ってくれているんだからな」

「だから、謝らなくていい」と俺は言う。

……まあ、皮肉を言わせて貰うと俺の事を護る為に頑張っている奴が勝手に俺の遺書を書くのもどうかと思うが。

「……さてと、それじゃあ」

しかし、そんなウリアでも俺を護る為に頑張ってくれているのは列記とした事実な訳で。

「今晚の戦闘の前に……腹ごしらえでもしておくか」

そして、夜はやってきた。

現在——時刻は午後9時半。

てつきり、また昨日と同じような怪物がやって来るのなら予め昨日の海岸に移動するのかを俺は思っていたので——今夜、ウリアが戦闘を行う為に選んだ場所に俺は少しばかり驚いていた。

俺とウリアは未来から転送されてくるであろう『魔導獣機』を待ち構えるべく——自宅から少し離れた住宅街の通路のど真ん中に立っていた。

「……なあ、ウリア。本当にこんな所で戦うつもりなのか？」

「ええ、勿論」

「勿論って……お前、昨日の同じくらいの規模で戦ったら、ここら辺一帯が吹き飛ぶぞ」

「だから、言っただでしょ、ここを出る前に。今日の戦闘は……あくまで、『魔導獣機』を未来から転送している奴を見付ける為」

「だから」とウリアは昨日と同じく夜空を見上げたまま言う。

「心配しないで……『魔導獣機』が転送されたら、それを一瞬で倒して、私は転送している奴を捜しに行くから」

「……何だろう。普段のお前を見るとその言葉に一寸たりとも頼もしさを感じない」

「なっ！　ちよっ、それは一体全体どういう意味——」

——その時だった。

俺の手の中で白い欠片がこちらと同じように光を放ったのだ。

「来たわね……」

そう言っ——夜空を振り仰ぐウリア。

しかし、俺は未だ光り輝くその欠片を見据えたまま先ほど家でウリアが語ったこの欠片についての説明を思い出していた。

「その欠片はね、魔力に対して反応を示すの」

俺の部屋にてウリアは俺が持っているペン状の白い欠片を指差して言った。

「だから、昨日は『魔導獣機』が現れた時にその欠片が光ったのよ」

「なるほど……まあ、古代に滅びたはずの文明に反応するのなら、『魔導獣機』にも反応するのか——って、あの化物、原動力は魔力なのか？」

「ガソリンとかで動いているのかと思った？」

「……い、いいや？」

正直、そう思っていたけれど俺はとりあえず誤魔化した。

ここで、俺がガソリンで動いていると思っていたなんて白状したらまたウリアに脳味噌が入っていないとか罵倒を浴びせられかねないからだ。

紅焰天使？

「『魔導獣機』の原動力は魔力——そして、あの巨大な機体自体も魔力であの形を保っているようなものの」

「そうだったのか」

「そう。だから、『魔導獣機』の中にある『核^{コア}』と呼ばれる場所を破壊すれば、『魔導獣機』の機体の全ては一瞬にして破壊されて、跡にはその欠片すらも残らないわ」

「……なるほど」

俺は昨日のウリアが破壊した『魔導獣機』の事を思い出す。

あの時——砂浜でウリアが炎の剣を『魔導獣機』の胸辺りに突き立てた瞬間、本体から？がれた翼までもが一気に焼失した。

「……とりあえず、秀が拾ったその欠片は、鍵であり、センサーのようなものだから。その欠片が光った時は——『魔導獣機』か、その他の何かが来ると思って警戒した方が良いわね」

——以上が、ウリアのこの白い欠片についての説明だった。

「本当に光った……って、事は」

俺は隣に居るウリアと同様に夜空を見上げる。

その瞬間、またもや空の景色の一部が歪みを帯び始めた。

「……なあ、ウリア。ちょっとした質問があるんだけど」

「何よ。手短かにね」

「この欠片が魔力に反応するのなら、どうしてこの欠片はお前に反応しないんだ？」

「それは……その、私には周囲に感知されないように、私の中の魔力を外に出さない為の——そう、術が掛かっているから」

「そうなのか……いや、聞きたい事はそれだけだ。宜しく頼むな、今夜も」

「うん、任せておいて、秀」

そう言っ——前方へとゆっくりと歩き出すウリア。

——何だろう。

俺が今の質問を——どうしてウリアそのものにこの欠片が反応しないのかを聞いた時。

気のせいかも知れないが……ウリアはどこか、その問いに答え難そうにしていた。

どうしてだろう。

そんな疑問を考えている内に——俺から5メートルほど離れた距離で立ち止まったウリアの足元に深紅に光る魔方陣が出現した。

魔方陣から湧き上る魔力のせいだろうか——ウリアのツインテールが空に向かってフワフワと上向きに漂っている。

……ていうか、今更だけどいつの間にかあいつツインテールに戻してるな、髪型。

戦闘中はあの髪型だと落ち着かないのだろうか。

そして——そんなどうでもいい思考を俺が巡らせている中で、夜空に段々と漆黒の穴が形成されていく中で。

ウリアは——“ 唱え始めた”。

「——天よ。我は器なり」

夜空ではそこに広がる満天の星を呑み込むかのように空間の捻れが激しさを増していく。

「神の力を受けるべき、器なり」

捻れはやがて渦へと変化して——そして。

「天よ——その神の器である我に神の力を授けよ」

夜空よりも暗い——漆黒の穴を創造した。

「神の力——ウリエル紅焰天使の力を」

不意に——俺の前からウリアの姿が消えた。

いや、消えたのではない——俺にはそう見えただけだ。

正確には“突如地上から溢れ出した巨大な火柱にウリアが呑み込まれた”——と言っべきなのか。

「ウリア……！」

初めはウリアが敵の攻撃に呑まれたのかと俺は誤解した。

しかし、まだ漆黒の穴からは『魔導獣機』は出て来ていない。

それならば——この炎の柱の正体は何なのか。

そう思った所でゆつくりと目の前の炎の壁が解け始めた。

そして——俺はその中に。

劫火の中に佇むウリアの姿を発見した。

「……ウリア」

炎の中からその姿を現したウリアは昨日と同じように背中から翼を生やしていた。

しかし、その翼は昨日の翼とはまるで“すがたかたち姿形”が違っていた。

昨日、ウリアが背中から生やした翼は単なる炎で形成された深紅に光る翼だった。

——けれど。

今、ウリアが背中から生やしているその翼は——何と云うか“実体が完全に再現されていた。

正確に言うならば、炎で無理矢理翼を象っているのではなく、深紅の光を仄かに帯びた白い天使の翼——と言った所だろうか。

そして、咄嗟に今俺が使った“天使の翼”という呼称はあながち間違っではないなかった。

ウリアの頭の上には——その翼と同じように深紅に光る天使の輪が浮かんでいたからだ。

まさしく——今のウリアは天使だった。

すると、不意にウリアはその天使の翼を羽ばたかせて上空へと飛翔した。

それと同時に空に出現した漆黒の穴からも何かが出て来た。

最初は——その『魔導獣機』を俺は蛇かと思った。

しかし、現代の常識が未来の常識にどれほどまで通用するかは解らないが——少なくとも、蛇は空を飛ばない事を俺は知っている。

それならば、その非常に蛇に近い『魔導獣機』は何をモチーフにして創られたのか。

——それは。

紅焰天使？

「……龍……！」

漆黒の穴から出て来たのは灰色の鉄製の巨大な龍だった。

その巨大な龍は蛇のようにくねくねと空中を滑るように進んで行く。すると、その龍の進行方向に天使化したウリアが立ちはだかった。

巨大な機械の龍はそのウリアの姿を捉えると——その大きな口を開けて昨日の怪鳥のように鳴いた——いや、吠えたと言うのが妥当か。

何しろ、凄まじくけたたましいノイズのような鳴き声を発したのは間違いなかった。

そして、昨日は建物も無い殺風景の海岸で戦っていたから解らなかったのだろう。

そのノイズで——周囲の家の窓ガラスが一瞬にして吹き飛んだ。

「うわっ！」

俺は降って来るガラス片に咄嗟にその場にしゃがみ込んで最低限自身を護る。

上空ではウリアが俺の為に戦ってくれているのだ。

俺だって——最低限は自分の身を自分で護らなければ示しが付かな

いだろう。

「くっ……！」

ガラス片の雨を凌ぎ切った俺は再度その場に立ち上がって上空を見上げた。

そこでは未だウリアと巨大な機械の龍が対峙している所だった。

すると、ウリアの“右手”に変化が起こった——深紅の光がその手に集約する。

そして、その光は大きな深紅の弓へと姿を変化させた。

創造された深紅の弓——更にウリアの“左手”にも深紅の光が集約し始める。

ウリアの“左手”に創造されたのは矢の方だった。

そのウリアの動きに『魔導獣機』は危険を察知したのか——それとも、それを転送した人物の方が危機を感知したのか。

不意にその巨大な機械の龍はウリア目掛けて突進を開始した。

昨日の怪鳥ほどでは無いが——それでも、龍は猛スピードでウリア目掛けて空中を突き進んでいく。

対するウリアは迫り来る巨体に臆する事無く——創造した光の矢を同じく創造した弓で構える。

ウリアの手によって矢が引かれる——光の弓の弦が軋んだ音を立てた。

——そして。

ウリアは左手を光の矢から“離れた”。

解き放たれた深紅の光の矢は巨大な龍の口を貫通し、胴体を貫通し、最後に尾を劈いて——光の一閃となって夜空の彼方へと消えた。

それは一瞬の出来事だった。

光の矢に劈かれたその巨体は——昨日の怪鳥とは違い、燃えるのではなく大爆発を起こした。

周囲に響き渡る轟音——吹き荒れる突風が空中に漂っている爆煙を纏めて吹き飛ばした。

しかし——結果は昨日と同じだった。

爆発の跡に残っていたのは——やはり、天使の如く翼を生やしたウリアの姿だけだったのだから。

「……ウリア」

俺は戦いの終わりを見届けて——安堵の息を漏らす。

——けれど。

ウリアの戦いの方はまだ終わっていないかった。

巨大な龍を一瞬で破壊したウリアは光の弓をその手から消すと再び足元に深紅の魔方陣を出現させる。

それから、暫しの沈黙の後——ウリアはこう言った。

「……見つけた」

そう呟いたかと思うや否や、ウリアはその深紅の光を帯びた天使の翼で羽ばたき——どこかへと飛び去ってしまった。

巨大な機械の龍が——『魔導獣機』が私を殺そうと迫ってくる。

けれど、私は全く臆しない。

恐怖すらも、感じない。

私はただ、弓を携えて、矢を構えて——ただそれを解き放てばいいのだから。

私の放った光の矢は私の飲み込もうとその両顎じょうごうを上下に開いた『魔導獣機』の口の中に命中した。

そして——その矢は命中しただけでは止まらなかった。

光の矢はその龍の胴体を貫通し——大穴を空けて、夜空の彼方へと

まさしく光速で過ぎ去ってしまったのだから。

私の前で龍が爆発を起こす。

秀は大丈夫だろうか——いや、大丈夫だろう。

爆発を起こしたという事は私の矢は見事『核』を撃ち抜いたのだから。

破片が秀に当たる訳が無い。

だから、私は次の行動を起こした。

爆風で空中に立ち込めていた灰色の煙が吹き飛ばされていく中で——私は発動している弓を一度解除して、更なる魔方阵を出現させる。

この魔方阵は——今の『魔導獣機』を現代に転送した人間を探索する為のものだ。

転送した人間の中に宿る魔力によって『魔導獣機』は人間からの命令を理解して、動く。

だから、周囲に残っている魔力の流れを辿れば——おの自ずと、先程の『魔導獣機』を操っていた人間のもとに辿り着く事が出来るのだ。

そして、私の思惑通り——魔方阵に反応があった。

「……見つけた」

私はそう呟いて背中に生やした翼で飛び——光の速度でその人間の

もとへと向かう。

紅焰天使？

住宅街の外れ——そこにあった森の広場に。

その男は、居た。

私はその男の居る広場へと降り立つ。

私が地面へと足を着いた瞬間、背後の木々の陰から新たな『魔導獣機』が飛び出してきた。

おそらく、この男が予備として念の為に転送しておいたものなのだろう。

モチーフとしている形は『狼』——だったのだろうか。

よく解らなかった。

何故なら——私はその『魔導獣機』が飛び出てきた瞬間に条件反射で創造した炎の剣を振るっていたから。

私の放った斬撃はその『魔導獣機』の首を刎ね飛ばした。

それから、私はやっとその『魔導獣機』の姿をちゃんと見る為にその機械の獣と向き合う。

首は無くなっているが——おそらくはモチーフは『狼』、もしくは『犬』だろう。

少しばかり——私の知っているそれらとはサイズが大きいような気もするけれど。

「くそっ！」

そして、私の後ろでそんな男の悪態を付く声と草むらを揺らす音が聞こえて来た。

逃げたか——私はそう思いながらも首を失った『魔導獣機』と対峙する。

首を刎ねたとしても、そこに『核』が無ければ倒した事にはならない。

「……………」

私は無言で炎の剣の柄を握り締める。

それと同時に首を失った『魔導獣機』が私に襲い掛かって来た。

しかし——遅い。

私は翼を羽ばたかせ——光速で移動しながら剣を振るう。

一般的に『魔導獣機』の『核』はその機体の中心にある。

だから、私は『魔導獣機』の機体を真つ二つに両断した。

二つに分かれた『魔導獣機』の機体は——地面に落下する前に劫火に焼かれて焼失した。

「……………」

焼失した『魔導獣機』に私は先ほどの男が逃げたであろう森の中を振り返る。

しかし、無論そこには既に男の姿は影も形も残ってはいなかった。

けれど、私は秀の為にあの男を殺さなければならない。

秀の為に、殺さなければならない。

「……後で、秀に怒られるかも知れないなあ」

いや、秀はきつと怒るだろう。

これだけの規模の森林を“焼き払ったら”——自然保護団体でなくとも、怒りを覚えるだろう。

でも——仕方がないのだ。

秀の命を守る為には。

例えば森林を巻き込んだとしても——その命を狙う人間を殺さなければならない。

だから、私は周囲から取り込んだ魔力を光に変換して——その光を炎の剣に集約させる。

集約された光は炎の剣を進化させ、その形状を変化させ、“炎の塊

”から“本物の剣”へとその姿形を変化させる。

私はその変化させた剣の柄を両手で握り締めると——目を閉じて、その切先を天に向けるように構えた。

すると、私が立っている森の広場から炎が巻き起こった。

湧き上った劫火は渦を巻いて——私が天に掲げている剣の刀身に集中していく。

——そして。

私は一度閉じた瞼を開けると——そのまま、一気に掲げていた剣を前方に広がる森林に向かって振り下ろした。

その瞬間。

広大な森林を——深紅の劫火が一瞬にして呑み込んだ。

「……………」

俺はウリアの帰りを家の前で待っていた。

ていうか、先ほど住宅街の外れの森の方でオレンジ色の——まるで、森全体が燃えたかのような、そんな光が見えたのだが。

気のせいだろうか……気のせいであって欲しい。

まさかのウリアでも、俺を護る為とか言いながら森林を全て焼き尽くすほど、馬鹿では無いだろう。

馬鹿では――。

「……いや、馬鹿かも知れないなあ……」

俺は遠い目でそんな事を呟いた。

だって、カップラーメン如きで俺に忠誠を誓うかのような事を言う奴である。

そんな事を思っていると――夜空に深紅の光を帯びた天使の翼を携えた少女が飛んできたのが見えた。

ていうか、紛れも無くウリアだった。

「よう、お帰り、ウリア」

「う、うん、ただいま、秀」

「お疲れ様、今日も大活躍だったな」

「で、でしょう？ もっともーっと褒め称えてくれてもいいのよ？」

「ああ、跡で褒め称えてやるよ。……でも、その前に一つだけお前に聞きたい事があるんだけど」

「な、何？」

「さっき、住宅街の外れの森がある辺りで、まるで大火災みたいな、そんな感じの勢いの炎の光が見えたような気がしたんだが……」

「……………」

「まさかお前、俺を護るとか言う名目の下に、森を全部燃やした——なんて事は言わないよな？」

「……………」

「……………」

「……………」

俺はウリアの頭をチョップした。

「い、痛いわね！　急に何すんのよ！　私まだ何も言ってないじゃない！」

「うるせえ、三点リーダの数、と言うか、沈黙が既に答を語ってるんだよ」

紅焰天使？

「解らないじゃない！ ただ単に文字数を稼ぐ為の三点リーダーの羅列かも知れないじゃない！」

「なるほどな、そういう考えもあるが、そっちの方がもっと駄目だ」

「だ、だって、仕方ないじゃない……あの『魔導獣機』を操っていた奴を倒す為にはああするしかなかったんだから」

「……………」

俺は目の前であからさまにしゅんとしてしまったっているウリアに少し驚いていた。

だって、戦いの時もそれ以外の時もずっと強気のウリアが——俺の前で凹んだ表情を見せたのである。

何か……こう、更にからかいたくなるのは何故だろうか。

もしかすると、俺は物凄くサディスティックな人間なのかも知れない。

「……って事は、ウリア。お前はあそこにあった森林を全て燃やし尽くしてしまったと言う訳だな？」

「う、うん……ゴメンナサイ」

「仕方ない……それじゃあ、罰として今日のお前の夕飯は抜きだ」

「ええっ！？　な、何で！？」

「実は、俺って森林愛好家なんだよ」

「そ、そうだったの！？」

「ああ、実はそうだったんだよ。お前は気付かなかっただろうが、俺の部屋の至る所には森林に関する本や雑誌が置いてあって、更にパソコンの中にはマイベスト森林画像が山ほど保存してある——俺はそれほどの森林愛好家なんだ」

「そ、そうだったんだ……あのつ、えっと、私……秀がそんな趣味を持っている事なんか、気付かなくて——ていうか、知らなくて」

「ああ、残念だなあ、あの森には二度と行けないのか……あの森には週に一度散策をする為に三年前から通い詰めている物凄く馴染みのある森だったんだけどなあ」

「ええっ、そ、そうだったの！？」

「ああ、最近ではあの森の精霊の声が聞こえるくらいにまで達してしまっただくらいだ」

「そ、そこまで……！　秀、あなたって聞こえない声が聞こえてくるほどの痛いくらいの森林愛好家だったのね……ゴメンナサイ、私その事知らなくて」

「……………」

本気で凹んでいるのか、それとも今俺の目の前に居るウリアが猫を被っているのか——何か解らなくなってきた。

「で、でも！ 心配しないで、秀！ 今日あなたの最後の友達の幼馴染の子は秀を見捨てちゃったけれど、今度からは私が秀の唯一無二の親友になって上げるから！」

「勝手に話を進めるな！ 俺にだって友達くらいは居るよ！ 流石に！」

「えっ、でも、友達が居ないから有りもしない友達を——いわゆる、エア友達を森の中で勝手に作っていたんじゃないの？」

「違うわ！ 俺はそこまで残念な性格じゃねーよ！」

「えっと、友達の名前はトモちゃんだったけ？」

「それは俺の事を言っているのか、それとも他の誰か残念な性格を持つ架空のキャラに対して言っているのか、どっちだ」

「ていうか、それ以上は言わないで欲しい。」

色々と危ないような気がする。

「ああもっ、いいよ、解った……森を燃やした件は水に流してやるよ」

「えっ、ほ、ホント!？」

「ああ、本当だ」

まあ、俺一人の権限でどうかしていい問題ではないのだろうけれど。

「けど、今度からはあそこまで大規模な事はやらかすなよ、ウリア」

「うん、解った……解ったから、その、今日の夕飯は……？」

「……………」

そこで気になるのが夕飯の事だよ。

「解ったよ。夕飯もちゃんと作ってやるから、そこまで凹むな、からかいたくなるだろうが」

「えっ？」

「間違えた。心配になって来るだろうが、そこまであからさまに凹まれると」

「……もしかして、私の事、心配してくれてた？」

「当然だろ。今に限らず、お前が戦っている時はいつも心配してやってるよ」

俺はウリアに向かってそう言った。

すると、俺は背中に衝撃を受けた。

ウリアに叩かれてもしたのだろうか——俺はそんな事を考えたけど

うやら違つようだった。

何故なら、未だ俺の背中には“その感覚”が残っていたからだ。

その——“二つの柔らかい弾力のある感触”が。

そう、俺は今、後ろからウリアに抱き着かれたのである。

「……う、ウリア？」

「私の事を心配してくれていたみたいだから……そのお礼で、抱き着いて上げたのよ」

「同世代の可愛い女子に、後ろから抱き着かれる」とそう言いながらウリアは俺の背中から顔を離してこちらを仰いできた。

「男子のロマンの一つでしょ？」

「フツ……自分で可愛いとか自惚れた言葉を言う女子に抱き着かれても……なあ？」

「何よそれー、素直じゃないんだからー」

「俺はあくまで素直だよ。単に素直な感想を語っただけで」

「何よ、もー」

「折角抱き着いて上げたのにー」とウリアはぷくーと頬を膨らませながら少し不機嫌な様子で家の中へと入って行った。

そして——ウリアが家の中へと姿を消したのを確認した俺は。

「……………はぁ……………！」

ずっと我慢していたため息をついた。

ため息とは言っても——呆れたものでは無く“至福”のため息である。

「う、ウリアの奴……………不意打ちにも程があるだろ……………」

実際、俺はウリアに抱き着かれた時、冷静な言葉を述べていたのだが——内心はドキドキだったのである。

つか、あのシチュエーションでドキドキしない方がおかしい。

正直言くとウリアが戦っている時よりも緊張したような気がする。

不謹慎だろうか。

「……………しかし」

俺はまだ微かに残っている“その感触”に先ほどのウリアが抱き着いてきた時のシーンを思い出した。

「ウリア……………やっぱり、あの妙なスーツ着ている時の方が胸デカいよな……………ずっと着てればいいのに」

「秀〜？」

「お、おう、どうした!」

おお、危ない……まさか、今の俺の独り言聞かれてないよな？

「早くしてよ。私、戦った後でお腹ぺっこぺこなんだけど」

「ああ、解った……カップラーメンで良いんだよな？ ていうか、それしかないけど」

「あつたりまえじゃない！ 本当は“しーふーどー”があればいいんだけど、今日はまたあの無味の方で勘弁して上げるわ」

「無味って言うな、スタンダードと言え。ていうか、何気にお前あつちの味も気に入ってるんじゃないか」

そんな事を言いながら俺はウリアと共に家の中へと入る。

ウリアはどうやらシーフードと言うかカップラーメンそのものが大のお気に入りらしい。

今度カレー味のヤツも食わせてやるか。

俺はそんな事を思った。

そんな事を思えるくらいに——俺はウリアに心を許せるようになってきた。

7月29日

（昨夜、●●町の住宅街の外れの森林が一夜にして焼失するという怪現象が起きました）

「……………」

（周囲の住民の話に寄れば、その怪現象が起こる前に謎の音で窓ガラスが割れたり、大きな爆発のような音がしたりした模様で、警察側はこの一連の騒動がテロの可能性もあると懸念しており、●●町の住人に注意を呼び掛けて――）

そこで俺はリモコンの遠隔操作でテレビの電源を落とした。

見ていられなかった――聞いていられなかった。

つか、これ以上見たくもなかったし、聞きたくもなかった。

すると、リビングに大きな欠伸をしながらウリアがやってきた。

家の中ではやはりリッインテールを解いているらしく――その金髪は寝起きだからなのか至る方向へとボサボサに跳ねてしまっている。

「あつ、おはよう、秀。今日は早いね――って、何よ、何か顔色悪いわよ？ 大丈夫？」

「……俺の顔色が本当に悪いのなら、それは多分お前に原因があると俺は思う」

「ちょっと、何を勝手に私のせいに行っているのよ。どうせ、アレでしょ？　変な夢でも見て夜中によく眠れなかったんでしょ？」

「……いや、よく眠れなかったのは事実なんだけどな」

しかし、変な夢を見た訳では無い。

昨日の夜、ベッドで寝ていた俺はウリアによって強制的にそこから立ち退かされる羽目になったのだ。

ウリアは俺の部屋で俺と一緒に寝ているのだが——いや、別に変な下心が俺にある訳では無くて。

寝惚^{ねぼ}けていたのか、意図的にやったのかは解らないけれど——とにかく、俺はウリアの手でベッドから立ち退く羽目になったのである。ていうか、引き摺り下ろされたと言っても良い。

放り投げられたと言っても過言では無いだろう。

「いやー、昨日はよく眠れたわ……お陰でもう昼なのに今の今までグッスリ眠っちゃったもん」

「そうか……ベッドは寝心地良かっただろ？」

「うん、案外良かったわね……って、あれ？　私、昨日ベッドで寝たっけ？」

「さあな、俺は“部屋の床”でグッスリ眠っていたから知らないな」

「そう。それならいいけど」

「……………」

態と“部屋の床”という部分を強調して皮肉交じりに言っただつたのだが——どうやら、効果どころか、昨日自分が寝惚けてやった事を思い出す気配すらない。

まあ、普段使っているベッドで女子が寝るというシチュエーションも中々——って、いやいや、何を言っているんだ、俺は。

「ていうか、テレビ点けないの？」

「点けたいなら点ける。そして、現実を受け止める」

「何よ、それ……訳解んないんだけど」

そう言いながらウリアはテレビの電源を入れるとリモコンを弄^{いじ}って適当なチャンネルに合わせ始める。

すると、意外にもウリアがチャンネルを合わせたのはとあるニュース番組だった。

それも、地方のニュース番組だから丁度良く先ほど俺が見た“その怪現象”の事が報道されていた。

「……………」

俺は傍にあった新聞を手に取りながらウリアの反応を見る。

さて、こいつは自分が起こした“怪現象”に対してどんなリアクションを見せるのか。

俺は新聞の記事を読むフリをしながら——ウリアの反応を伺う。

そして、そのニュース番組にてその“怪現象”についての報道が終わった所でウリアはこう言った。

「……ふーん、世の中不思議な事も起こるものね」

「……………」

俺は筒状に丸めた新聞でウリアの頭を比較的強く殴った。

「痛いわね！ 昨日もそうだったけれど、何で急に私の頭を叩くのよ！」

「お前に罪の意識が全く存在していなかったからだ」

「何よそれ！ 全く^{もっ}以て意味が解らないんだけど！」

「うるさい、黙れ。お前に戦闘以外の何かを期待した俺が馬鹿だった」

「何言ってるのよ！ 私だって戦う以外に出来る事くらいあるんだから！」

「ほー、それじゃあ、何か一つ見せて貰おうじゃないか」

「良いわよ。秀、それじゃあ」

そう言つて——握り拳を俺に見せ付けたウリアは。

「ジャンケン——ポン！」

ウリアの掛け声に俺は反射的にグーを出す。

ちなみに、ウリアはチョキを出していた。

「……………」

「……………」

——そして。

「……………ほらね！」

「ほらね、じゃねーよ！ ジャンケンくらいルール知ってたら誰でも出来るよ！ そして、そのドヤ顔を止める！ 何かイラッと来るから！」

「つか、お前負けてるし！」

ジャンケンが出来るって主張したいのならせめて俺に勝ってから言えよ。

「……………ていうか、話は変わるけどさ、ウリア」

「何よ、秀」

「お前、着替えなくていいのか？」

「着替え？」

「いや、だから、お前ずっとその洋服着てるじゃんか。だから、その……他の洋服に着替えたくはないのか？」

「うーん、そうねえ……確かにこの洋服はいわゆる戦闘服みたいなものだから、動き易いけど、正直に言えば可愛くないわよね」

7月29日？

「だろう？ だったら、他の洋服に着替えてみたいよな？」

「それは着替えてみたいけど……それ以前に、この家って女物の洋服あるの？」

「あるに決まっているだろう」

「……………」

「……えっ、何で俺は今ウリアから蔑むさげすような視線を受けているんだ？」

「……何で、今の所、秀しかこの家の住人を見た事が無いのに、この家に女物の洋服があるのよ」

「……………」

……あつ。

「お前、俺を女装が趣味の変態だと思っているな！？」

「それ以外にどう思えって言つたよこの変態！」

「既に“変態”という呼ばれ方が定着している！？ 違う！ この家に洋服があるのは俺に姉が居るからだ！」

「……その姉って、秀が女装した際に生み出される姉という設定の

話じゃないわよね?」

「お前、どんだけ俺に女装趣味を定着させたいんだよ!」

「女装趣味を定着させたい訳じゃないわ。秀に変態キャラを定着させたいの」

「断固拒否させて貰おうか!」

「ていうか、既に秀には変態キャラが定着しているけれどね」

「何っ!? 莫迦^{ばか}な、一体いつ俺に変態キャラが定着していたと言うんだ……!」

「私の胸に顔を埋めたり、私の裸を見たり」

「全部不可抗力じゃねーか!」

それは決して俺のせいではない!

「全く、不可抗力で変態扱いされては堪らないぜ……確かに、幼馴染の霧歌にはメイドコスを頼もうとした事はあるが」

「……………」

「……………」

「……………ねえ、ちょっとそこの変態」

「変態じゃない! 幼馴染の女子にメイドコスを頼む事くらい日常

茶飯事だろ！？」

「今すぐに黙らないと私が強制的に黙らさせるわよ」

「えっ、キスで？」

そして、俺はウリアの拳を鳩尾みぞおちに受けた。

「ぐっ、おおおおおお……！」

「……拳で黙らせるって、言ったのよ」

「言っていないじゃん！ 言う前に飛んできたぞ、お前の拳は！」

「それで？ 秀のお姉さんの部屋はどこにあるのよ。さっさと案内しなさいよこの変態」

「案内してやるのは構わないけれど、俺の呼称を“変態”で統一し始めるのは止める」

「えっ？ 秀ののしって罵られる事に快感を覚える特殊な性癖の持ち主じゃないか？」

「それこそただの変態じゃねーか！ 俺は生憎あいにく、そんな特殊な性癖を持ち合わせてなんかいない！」

「ふーん……それで？ その変態さん」

「兵隊さんみたいに言っな。名前で呼べって言ってんだろ」

「真之乃変態さん」

「俺の名前は変態じゃねえ！俺の大事な名前に何て事をするんだ！」

「えっ？名前で呼べって言うのは“変態”という呼称を名前の代わりに使って下さいって意味じゃなかったの？」

「何そのお前の捻くれた理解の仕方は！違うに決まってるだろ！」

「解ったわよ……それじゃあ、変態秀さん」

「今度は苗字に何て事をしやがるんだ！つか、いい加減に俺の名前をちゃんと呼んで下さい、お願いします！」

「まあ、そこまで頼まれちゃ仕方ないわね……」

「……………」

こいつ……………！

実は、生粋のSだな……………！

「……………まあ、いい。俺の名前の事は許してやろっ」

「あら、怒らないの？」

「怒らないよ。今は、な」

「……………“今は”？」

「今日のお前の夕飯を抜けば済む事だからな」

「なっ……!!」

すると、ウリアは戦慄した表情を見せると椅子からガタツと音を立てて立ち上がった。

「わ、私の夕飯を抜くなんて……! 秀、私はあなたがそんな極悪人だなんてちつとも思わなかったわ……!!」

「お前、何か昼ドラでも観たのか?」

台詞が演技染みていると言つか、昼ドラ染みているのだが……。

「冗談だよ。別に怒ってなんかいないから、さっさと俺に付いて来い」

「何だ。やっぱり、秀って女子から罵られると興奮するような変態だったのね」

「だから変態じゃないって言ってるだろ」

「見直したわ」

「見直すな! 俺は見直されるような事は一度もしていない!」

そんな会話を交わしながら俺はウリアと共に二階の姉の部屋へと向かうのだった。

姉の部屋は俺の部屋のすぐ隣に存在する。

俺は部屋の扉を押し開ける。

扉の向こう側には――当たり前だが、姉の部屋があった。

姉の部屋を見るのは――何年ぶりだろうか。

初めてくらいに感じるほどに――久しい感じがする。

7月29日？

「へーっ、ここが秀のお姉さんの部屋なのね……」

すると、俺より先にいつの間にかウリアが姉の部屋に入っていた。

「……ああ、そうだよ」

俺は何となく苦笑しながらウリアに続いて姉の部屋に入る。

部屋に敷かれた赤いカーペットも、タンスも、机も、何もかもが昔のままだ。

しかし、少しだけまた埃が溜^{ほこり}まっているだろうか。

また今度掃除をしなければならない。

「そのタンスに洋服が入っているはずだから、適当に出して合わせて良いぞ」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……
…流石は秀ね、尊敬するわ」

「どういう理屈で尊敬したのかは知らないが、本来、尊敬すべきではない事柄で俺の事を勝手に尊敬し始めるのは止める」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……
…流石は秀ね、尊敬するわ」

「オイ、何故その言葉を二回言った」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて…
…流石は変態ね、軽蔑^{けいべつ}するわ」

「だから、何故その言葉を――」

……ん？

「あつ、お前！ 今さり気無く俺の事をまた“変態”って言ったな
！」

「“変態”とも言ったし、“軽蔑する”とも言ったわよ」

「何だと！？ お前、いい加減にしないと今度は俺がお前の口を黙
らせるぞ！ 主にキスで！」

「そんな事をしたら、警察を呼ぶわよ」

「警察だけは勘弁して下さい、お願いします」

気が付けば、俺はまだ未遂であるにも関わらずウリアに平謝りをし
ていた。

ていうか、どうして俺はウリアに謝っているのだろう。

これでは、まるで俺が日常的に犯罪染みた行動を取っているみたい
ではないか。

そんな事を思っていたら、タンスの引き出しを開ける音が聞こえて

来たので俺は顔を上げた。

「……ていうか、秀」

「何だ？」

「洋服を貸してくれるのは嬉しいんだけど……これ、私が勝手に使ってもいいの？ お姉さんのでしょ？」

「ああ、良いんだよ、別に」

「ていうか、秀にお姉さんが居るのなら……そのお姉さんはどこに居るのよ。今の今まで一度も見掛けていないけど」

「姉は東京の大学に見事合格して、今は向こうに住んでるんだよ」

「へーっ……東京——首都圏辺りの大学って、もしかして名門なんじゃないの？」

「ああ、名門の中の名門だ。日本一頭の良い大学と言っても過言では無いかも知れないな」

「……秀のお姉さんってそんなに頭が良い人なんだ。秀のお姉さんだから、てつきり馬鹿な人だと思い込んでた」

「お前、遠回しに俺の事を馬鹿呼ばわりしていないか？」

「気のせいじゃない？ 私はそんな事、微塵^{みじん}たりとも思っているわよ」

「微塵には思っているんじゃないか」

「それじゃあ……ついでに聞くけど、お父さんとお母さんは？」

「母さんはこことは別の県で——別の場所で、とある洋服のブランドの専属デザイナーをしていて、滅多に家には帰って来ない。まあ、仕送りをいつも送ってくれているから、文句は全くないけど。それで……」

……父さんは。

「父さんは……三年前に、交通事故で死んじゃった」

すると——俺のその言葉にウリアはハッとして罰の悪そうな表情を浮かべて。

「あつ……その、ゴメンナサイ、秀」

「気にするな。三年前の事だ……俺ももう流石に“その事”を気にしていないから」

「……でも」

「ほら、そんな事よりも早く色々と着て回れよ。俺はお前が洋服を選んでいる間にカメラを持って来るから」

「……うん、解った——って、ちょっと待ちなさい」

姉の部屋を出ようとした所で俺はウリアから呼び止められた。

「……ねえ、秀」

「……何かな、ウリア」

「シリアスな雰囲気吞まれて見落とす——いや、聞き落す所だったけれど。どうして、今から私が色々洋服を着て回るのにカメラが必要な訳？」

「……なあ、ウリア」

「……何よ、秀」

「シーフードのカップラーメン……買って来ようか？」

「そうね、久しぶりに食べたいわね、“シーフードー”。買って来てくれたら、今の秀の失言については忘れて上げようかしら」

「そ、そうか……それじゃあ、俺ちよつと行って来るから」

「うん、解ったわ。いつてらっしゃい、秀」

「おう、行って来るわ」

そう言つて——俺はウリアの視線を背中に感じながら部屋の外に出ると扉を閉めた。

「……………」

シリアスな雰囲気で誤魔化せると思っていたのだが——。

「世の中……そこまで上手く行く訳ないか」

そう呟いた俺はトボトボとした足取りで寝間着から洋服へと着替える為に部屋へと戻るのだった。

晴れ渡った雲一つない晴天の下。

家から出て——近くのスーパーの前まで来た所で俺はふと疑問に思った。

「……そういえば、俺って追われている身なんだよな？」

今更ながらの疑問であったが、俺はそんな事を思っとっさて咄嗟に周囲を見渡す。

7月29日？

「拙^{まず}いな……ウリアに同伴して貰えば良かった。でも、そういえば、今まで『魔導獣機』が襲ってきたのは夜だったよな……」

それに、ウリアは昨日その『魔導獣機』を操っていた奴を――倒したのだ。

「……それなら、比較的安心なのか」

若干の平穩を感じつつ俺はとりあえずスーパーの中へと足を運ぶのだった。

「シーフード、シーフード……おっ、あった」

俺は買い物籠に棚から発見したシーフードのカップラーメンを入れる。

「それから、後は……ついでにカレーでも買っておくか」

続いて、俺はカレー、及び、スタンダードのカップラーメンを適当な数だけ買い物籠に入れた。

しかし、こうやって買い物籠にドカドカと商品を入れる行為というのは、些^{ちや}か心地よい気分になる。

何だか、大富豪になったみたいだな——そんな気分を味わえるからだ。まあ、買い物籠にドカドカと入れられる商品が未だにカッププラーメ
ンから一向に増えないのも考える所ではあるが——。

「……ん？」

——と。

そこで、俺は野菜コーナーを歩いている霧歌の姿を発見した。

「おっ、きり——」

俺は霧歌にいつも通り声を掛けようとして——口を噤^くむ。

何をやっているんだ、俺は。

俺は一度、玄関で霧歌に全裸で居る所を見られたんだぞ！

しかし——このまま霧歌に誤解を受けたまま夏休みを終わらせる訳には行かない。

せめて、二学期が始まるまでには霧歌との関係を修復しておかなければならない。

そして、これが唯一無二のチャンスかも知れない。

……それならば。

俺が取るべき行動は——たった一つだ。

「……き、霧歌——！」

俺が選択した行動はいつも通りに霧歌に向かって声を掛ける事だった。

大丈夫、大丈夫だ。

霧歌なら——ちゃんと事情を説明すればあの事を許してくれるはず。俺の呼び掛ける声に霧歌は陳列している野菜から俺へと視線を向けた。

——そして。

「……あつ、真之乃君じゃない。どうしたの？」

そう言つて——俺に笑みを見せてくれた。

良かった。

どうやら、霧歌は怒っていないようだ——って、ん？

んん？

あれ、何か違和感が……あるような気がする。

今、霧歌は俺の事を何と呼んだ？

「き、霧歌？」

「何？ 真之乃君、あなたの名前は真之乃君でしょ？ 何を名前を呼び間違えられたみたいな顔をしているのよ、真之乃君は」

「いや、だって、最近まで霧歌、俺の事を下の名前で——正確にはあだ名で呼んでいたじゃないか」

「あれ、そうだったっけ？ ゴメン、よく思い出せないわ。どうしてかしら。もしかしたら、最近途轍もなく記憶の中から抹消抹消したい出来事があつたからかも。ゴメンナサイね、真之乃君」

「……………」

——ここで、俺は確信する。

こいつ、絶対に“あの事”を根に持ってやがる！

いや、当然と言えば当然なのだろうけど、まさかここまで根に持っているとは！

明らかに苗字で呼んでいるのも態とだし！

さり気無く会話の中に“あの事”を臭わせる発言を織り交ぜているし！

怖い！ やっぱり、こいつ怖いよ！

「……………あ、あの、霧歌、さ」

「何？ 真之乃君——って、あつ、またカップラーメンばかり買おうとして。駄目よ、真之乃君。ちゃんとカップラーメンだけじゃなくて、料理を作れとは言わないけれど、他にもちゃんと食べないと。栄養、偏っちゃうよ？」

「いや、うん、忠告ありがとう、霧歌。ところでさ——」

「あつ、それから、真之乃君はちゃんと夏休みの宿題は終わらせてる？ 駄目よ、ちゃんと日々一つずつ終わらせないと。夏休みというのものはね、永遠に続きそうで実は短いんだからね？ 真之乃君、ちゃんとそこら辺理解してる？」

「ああうん、理解してる……でさ、霧歌——」

「本当に？ 理解してるの、真之乃君は。今の今まで夏休みの宿題を真之乃君は期日までに終わらせた事が無いんだから、本当に、ちゃーんと理解しなきゃ駄目だよ、真之乃君は。真之乃君が今年の夏休み、提出日までに宿題を終わらせて来なかったら私怒っちゃうんだから——」

「俺が悪かった！ この通りだ！」

俺は咄嗟にその場で土下座をしていた。

周囲の視線など関係無かった。

俺がこんな所で土下座をするような格好悪い人間だと思われても良かった。

女子の前で土下座をするようなそんな格好悪い人間とも思われても

全然構わなかった。

ただ、長い事名前で俺の事を呼んでくれた幼馴染からこれ以上苗字で呼ばれ続けるのには——精神的なダメージがあった。

一言で言えば嫌だった。

いや、意外と辛いんだよ、苗字で呼ばれるのって。

死ぬほど辛いんだって、本当に。

ていうか、辛い以前に——俺はきっと霧歌から嫌われたくなかった。

あんな誤解を受けたまま嫌われるのが嫌だったのだ。

どうしようもなく嫌だったのだ、俺は。

多分、だけど。

7月29日？

「……………」

当然ながら、俺には今霧歌がどんな顔をしているのか解らない。

だって、土下座をしているから地面——もとい、スーパーの床しか見えていないからだ。

だから、霧歌が今どんな表情をしているのか——俺には到底解るはずもない。

もしかしたら、“あの事”で軽蔑した表情を浮かべているかもしれない。

こんな真昼間から公衆の面前で土下座をした俺に引いているかもしれない。

ていうか、それ以前にもう既に俺の前から音も無く立ち去ってしまった後なのかもしれない。

そして、俺はただ一人で無言のまま土下座をしている状態なのかもしれない。

……………。

最後のだけは、何か嫌だな。

そんな自分を思い浮かべるだけで何か泣きたくなくなる。

「……顔——いや、体を上げてよ」

すると、頭上から霧歌の声が降って来た。

その声に俺は少しばかり安堵する——どうやら、霧歌はこんな俺を無視して立ち去るほど薄情な奴では無かったようだ。

まあ、霧歌がそんな事をしないのは幼馴染だから知っていたけどな！

……………。

さて。

霧歌から声を掛けられた俺はゆっくりと——顔を上げて見る。

顔を上げた先には、無論、霧歌の姿があった。

そういえば、今更だけど霧歌の私服姿を見たのは随分と久しぶりな気がする。

幼馴染とは言えども、小学校くらいから余り遊ばなくなったからなあ……。

だから、今の俺には霧歌の私服姿は物凄く有り難いものであり、また、物凄く萌えるものなのであった。

……いや。

今はそんな事を言っている場合じゃないな、うん。

「……この前の事、だけど」

霧歌は床に座ったままの俺を見下ろして言う。

「ちゃんと、私が納得してくれる説明をしてくれるのなら……許して、上げる」

「あ、ああ、する、するよ。ちゃんと霧歌が納得してくれるような説明をするから……だから」

「……うん、解った」

「それじゃあ、許して上げる」と。

そう言つて——霧歌は俺に笑みを見せてきた。

「えっ……も、もう、俺の事を許してくれるのか？」

余りの呆気無さに俺は拍子抜けしてしまった。

「だって、私が納得するような説明をちゃんとしてくれるんでしょ？」

「あ、ああ……勿論」

「だったら、“あの事”が一体どんな状況下で起きた事であっても、ちゃんとした説明をしてくれるのなら、私は許すよ？」

「……霧歌、お前——」

「でも、正確な説明をした上で、“あの事”が納得できたとしても“私的に”納得できなかったら——その時は、どうなるか解っているよね？」

「あ、ああ、うん……勿論、だよ」

霧歌は黒々としたオーラと共に俺に向かって満面の笑みを見せて来たのだった。

つか、やっぱり怖い。

小学校の頃はそこまで怖くなかったのになあ……何が霧歌をここまですべて変えてしまったのか。

「それじゃあ、今はとりあえず、呼び方を“秀ちゃん”に戻して上げる」

「ていうか、やっぱり態だったのか……。もう二度とその呼び名で呼ばれないかと思うとヒヤヒヤしたぜ」

「あれ？ 秀ちゃん、あだ名で呼ばれるのは嫌いじゃなかったっけ？」

「あだ名で呼ばれるのは嫌いだが、お前にあだ名で呼ばれる事自体は嫌っていないのさ」

「何よそれ、変なの」

そう言って——小さく笑う霧歌。

いつも笑っていれば可愛いのだが……こいつも。

いや、笑っていなくても十分に可愛いが。

俺は自宅の前に辿り着いた所で重要な事に気付いた。

いや、ていうか、何故家に辿り着くまでに“その事”に気付かなかったのか。

俺は馬鹿か。

その場面はカットされたから——何て理由は言い訳にはならない。

ていうか、俺が言っているいい台詞では決していないだろう。

俺が自宅前で——漸く気付いた重要案件。そのこと

それは——霧歌にウリアの事を“どうやって”納得させるか、だった。

ウリアの事を納得させる為にはウリアの全てをありのままに語ればいいのかだろうか。

例えば——。

「こいつはウリアだ。俺の事を護る為に、2056年の未来からやってきた魔法少女なんだよ」

いや、無理だろう！

絶対に無理だ！

大体、ウリアのその説明自体にも無理があるのに！

そもそも、未来からやって来たのに魔法少女って、ウリアは色々と混ざってるんだよねあ！設定が！

未来からやって来た未来人なのか！

それとも、魔法少女なのか！

せめてどちらかにしてくれよ！

そして、例えそんな説明をしたとして――。

「へーっ、そうなんだ。凄いね、ウリアちゃん。私、ちょっと尊敬しちゃった」

なんて展開になる訳が無い！

霧歌が語尾に『』を付けた口調になる事も含めて有り得ない！

誓ってもいい――神に誓ってそんな展開には絶対になる訳が無い。

7月29日？

「……………」

どうしよう。

どうすればいいんだろう、この状況。

「秀ちゃん」

「えっ、な、何？」

「入らないの？ 家に」

「い、いや、入るよ？ 入るけど……えっと、その、鍵をズボンの
どちらのポケットに入れたか忘れちゃって」

「秀ちゃん、それは多分両手を同時にポケットに突っ込んで
解決すると思うよ？」

「……………」

そう言えばそうだ。

何を言っているんだ俺は。

追い詰められていたとしても今の言い訳は酷過ぎるぞ。

そんな訳で、俺は両手をズボンのポケットに同時に突っ込んで（ち

なみに、鍵は左のポケットに入っていた）鍵を取り出すと玄関の施錠を解く。

とりあえず、霧歌は俺の部屋に上げよう。

ウリアはきつと今、リビングで何かしらテレビを見ているはずだ。

2056年——ウリアが話した通りの世界ならば、テレビなんて代物は余りお目に掛かれないはずだから。

きつと、ウリアは今頃テレビに熱中している事だろう。

だから、ウリアに気付かれないように霧歌を俺の部屋に上げる。

ウリアの説明はそれからだ。

「……よし」

完璧な作戦を一瞬にして作り上げた俺は玄関扉を引き開けて――。

「あつ、やーっと帰って来た」

——玄関に座っているウリアの姿を発見した。

「もう、何やってたのよ、秀は。お腹空き過ぎて死んじゃうかと思っただじゃない」

「……………」

そのウリアの言葉と共に——俺の中で折角作り上げた完璧な作戦が

音を立てて崩れて行くのを俺は感じていた。

いや、そもそも完璧な作戦だったのかどうかさえ、崩れ去った今では解らないけれど。

とりあえず、作戦が崩壊してしまったのだけは解った。

「……………」

……っか。

「何でお前こんな所に居るんだよ!」

「ええっ!? 何か秀が急に怒り始めた!？」

「折角、普段は活用しない脳細胞を全てフルに使って作り上げた最上級の作戦が台無しだろうが! どうしてくれるんだよ!」

「ちょ、ちよつと、何を理不尽な怒りを私にぶつけているのか知らないけど、それは多分私のせいじゃ——」

「うるせえ! 責任取れ! 責任取って後で俺の前でメイドコスをしろ!」

「秀! ドサクサに紛れて私にメイドさんの格好をさせようとしてるでしょ!」

「っ! 何でお前テレビ見てないんだよ! 2056年から来たお前にはテレビは結構珍しいはずだろうが!」

「いや、確かに珍しいんだけど……この時間帯は昼ドラとニュースばかりで余り面白くないと言うか何と言うか」

「確かにそれには俺も同意だな！ 何で昼ドラの再放送ばかりするのかと夏休み中には特に思ってしまうがな！ それでも昼ドラは面白いものなんだよ！ ニュースは為になるものなんだよ！ 余り見た事無いけどさ！」

「秀、何かさつきから言っている事が支離めとうれ——メチャクチャだよ！」

「言えろよ！ 支離滅裂ぐらい言えろよ！ まさかお前、日本語が達者っていう設定も実は嘘なんじゃないだろうな！」

「せ、設定って言っな！ 今のはちょっと噛んじやっただけだもん！ 本当だもん！」

——そして。

「秀ちゃん、何をそんなに怒って——あっ」

「あっ」

ウリアと霧歌は——出会った。

出会って、しまった。

つか、出会わなくて良かったのに。

……そして。

互いに出会った二人が互いに向けて言った言葉はこうだった。

「この前、この家の廊下でタオル一枚で居た人じゃない」

「この前、全裸で居る秀に親友としての見切りを付けて出て行った人だ」

霧歌とウリアは——そんな言葉を互いを指差して交わしたのだった。

それが二人の交わした最初の言葉だった。

そして、それは二人の交わした最初の言葉であると同時に、最悪の言葉でもあった。

シチュエーション的にも。

俺のイメージ的にも。

今後の——展開的にも。

色々と——最悪の言葉だった。

三つ巴

『三つ巴』——という言葉をご存知だろうか。

『三つ巴』という名の通りなのか否かは解らないけれど、とにかくその単語には三つの意味が存在する。

一つは、三つのものが互いに対立して入り乱れる事だ。

人とか、国とか——とにかく、三つのものが抗争を繰り広げたりする事を言う。

そして、もう一つは紋所、及び、文様の名前だ。

紋所・文様とはいわゆる家門の事であり、特に、お玉杓子たまじやくしのような形をした『巴』と呼ばれる柄が三つ合わさって円形になっているものの事を『三つ巴』と言う。

それから、最後の三つ目の意は——三人が向かい合って座る事である。

その場合は『三つ巴』ならぬ『三つ鼎』かなえとも言つらしい、のだが。

何故俺が何の脈絡も無く、何の前置きも無く、突如こんな日本語の意味をペラペラと語り始めたのかと言えば。

「……………」

「……………」

「……………」

まさに——現在がその『三つ巴』状態だったからだ。

7月29日、この日遂に俺の幼馴染である霧歌と俺の家に居候している身であり、未来からやってきた魔法少女であるウリアは出会ってしまった。

しかも、“昨日の事”もある為なのか——こうして、今はリビングのテーブルに三人の人間が一堂に会していると言つのに、『三つ巴』状態と言つのに。

「……………」

「……………」

「……………」

誰も——本当に誰も、一言も、一単語も、一文字も喋らないのである。

こういう時にこそ、ウリアにはいつもの馬鹿げた発言をして欲しいものなのだが——この場の雰囲気の流れ石に察知しているのか、ウリアでさえこの状況には口を開かないで居る。

「……………」

「……………」

「……………」

……っか。

誰か喋れよ。喋ってくれよ。

沈黙が辛いという事もあるが——何より。

このまま無言で一章が終わってしまいそんな事が何よりも怖い。

一章の全てが三点リーダーで無言と言う名の会話を交わすだけなんて

——誰も見ないし、読まないぞ、そんな物語は。

——という訳で。

とりあえず、俺がこの場を打開する事にした。

いや、今言ったメタ発言が俺の勇気を奮い立たせた訳では決して無いのだが。

とりあえず、ね。

ただし、“昨日の事”もあって、霧歌には話し掛け辛いので——俺はとりあえず、ウリアに話を振る事にした。

意気地無しとも、ヘタレとも思って頂いて構わない。

だって、怖いもの。

怖いものは怖いもの。

「……そ、そういえば、ウリア？」

「えっ……な、何よ」

「お前、上の部屋で着替えの為に洋服を選んでいたんじゃないのか？ さっきはちょっと動揺していて完全に忘れていたけれど、そういえばお前その変な格好のままじゃないか」

「へ、変な格好って言わないで。これは立派な戦闘服なんだから。……いや、その、着替えようと思ったんだけど、着た事無い服ばかりだったから、着方が解らなかつたって言うか……何より」

「……何より？」

「何より……その」

ウリアは俺の方を暫し無言で見据えると――俺を避けるかのように若干頬を赤らめて視線を逸らして。

「な、何でも無い。とにかく、着る事が出来なかつたから、着替えていないのよ」

「あ、ああ。そうだったのか……ふーん。それは何か、悪かったな」

「いや、別に……秀のせいじゃ、ないけれど」

「だ、だよなあ……」

「……………」

「……………」

……拙い。

また沈黙が訪れてきやがった。

つか、呼んでねーよ、沈黙。

お前どこかに帰れよ、沈黙。

そんな感じで俺が有りもしない存在に心の中で罵倒を浴びせていた時だった。

俺が勇気を奮い立たせた事がどうやら沈黙を打ち破る打開策になり得たようだ。

「……………ねえ、秀ちゃん」

霧歌が——漸くその口を開いたのである。

「その人の事、私に紹介してくれないの？」

「えっ……………ああ、紹介、紹介、ね。ああ、勿論するよ」

「ほら」と俺はウリアの背中を軽く叩いてこう促した。

「ウリア、霧歌に挨拶するんだ」

「ハイ……………えーっと、ウリアル＝ブレイザーよ。ウリアって呼

んで貰っても構わないわ」

「ウリアルル・ブレイザー……って事は、やっぱり見た目からもそうだけど、外国人なのね。えーっと……ウリアちゃん、で良いのよね？」

「ええ、勿論よ。何なら神とでも呼んで崇^{あが}めて貰っても一向に構わないわ」

何やら意味も無く調子に乗ってきたウリアの後頭部を俺は叩いた。

そして、ウリアはその衝撃に勢い余ってテーブルに顔面をぶつけた。

「な、何するのよ、顔が痛いじゃない……特に鼻」

「うるせえ。お前が勝手に何か調子に乗り始めるからだ」

三つ巴？

「え、えーっと……」と俺とウリアの遣り取りに呆れたのか、それともウリアの言い回しに呆れたのか、どちらかは解らないが霧歌は苦笑を浮かべてこう言った。

「ウリアちゃんは……その、何と云うか、この前この家でお風呂に入っていたみたいだけど。その……秀ちゃんとは、一体全体どういう関係なの？」

「……………」

その問いかけに――頭を叩かれた事を根に持っているのか、ウリアは俺を横目でじっと見据えた後に、その霧歌の質問に対してこう答えた。

「私は、この家に居候させて貰っている身なの。もう、秀とは本当に仲良くさせて頂いて。昨日なんか、私は秀がいつも使っているベッドで、それも秀と同じ部屋で寝たわ」

「オイ、お前！ どうしてそんな勘違いされるような表現をあえて使うんだ！」

「何よ、私は嘘は言っていないわよ？」

「確かにそうだけでも！ 霧歌に誤解を招いたらどうするんだよ！ 折角この前の疑いが晴れそうと言う時にお前はまた爆弾を落とすやがって！ お前は俺をそんなに社会的に抹殺したいのか！」

「抹殺したくないと言えば嘘になるわね……」

「要するに抹殺したいと思っっている訳だな！ お前、やっぱり後で罰として夕飯を抜かれるか俺の前でメイドコスをするかどちらかを選べ！」

「ていうか、秀はどうしてそこまでメイドコスに拘^{こだわ}るのよ！ そこまでメイドさんの格好をした誰かが見たい訳！？」

「メイドさんにはなあ！ 夢と希望が沢山詰まっているんだよ！」

「何それ訳解^{わけ}解^{かい}んない！ 私が抹殺する以前に秀は社会的にはもう終わっちゃってるよ！」

そこで俺はハツと我に返る——いや、ずっと素面^{すめん}だったつもりなのだが、世間一般的には“我に返る”という言葉を使った方が良くしろ。

そして、ハツと我に返った俺はただならぬ黒々しいオーラを放っている霧歌の存在に気付いた。

「……………」

あつ、ヤバイ。

今のメイドさん発言で更に引かれてしまったかもしれない。

もしかすると、日々俺はこの居候しているウリアに対してメイドコスを強要しているような変態だと思われてしまったのかも知れない。

.....。

いや、もしかしくてもそう思われて当然か。

「拙い、墓穴を掘ってしまった……ん？ 墓穴？ ああ、なるほど、穴があつたら入りたいという言葉は元々こういう組み合わせを用いる為に作られた言葉だったのか」

「秀ちゃん」

「それ違うから」

前方と左隣から一斉にツツコミが来た——ていうか、ツツコまれたという事はまだ俺は完全に霧歌、及び、ウリアの二人に見放されてしまった訳では無いらしい。

「『墓穴を掘る』というのはね？ 自分で自分のお墓を作るという事から、自らが進んで破滅に向かっていく事を表した言葉なの。解った？ 秀ちゃん」

「そして、『穴があつたら入りたい』は、身を隠したいほどに恥ずかしいと思える事から、自分の身を隠せる穴があるならば今ここに入ってしまいたい——という心情を表した言葉なのよ」

「『穴をして入るべからしむ』も大体そんな感じの言葉だったかな」

「そうそう、『汗顔の至り』とか、それから、『面目ない』って言葉も確かそういう感じの意味よ」

「あら、意外と物知りなのね、ウリアちゃん。私見直しちゃった

「

「エヘヘ、イヤー、それほどもであるかなー、なんちゃって」

「……………」

……何、お前等急に仲良くなっちゃってんの？

「……つか、霧歌…………お前が語尾に『』を付けて話すなんて思っても見なかったよ。」

そして、ウリア。お前も少しは否定しろよ。

それからお前は語尾に『』を付けるな。

何かイラッとする。

「……………」

……しかし、待てよ。

この状況はもしかして…………かなり良い感じの雰囲気なのではないだろうか。

これは更に会話を交わして雰囲気を作り緩和させるべきだな、うん。

「…………ま、まあ、その程度の言葉くらい、俺は知っていたけどな。ほら、アレだよ、アレ。日本人だから、あえて、日本語を間違えたみたいなの？ ウリアは外国人だから、何と言うか…………ハンディキャップみたいな、そんな感じのノリで俺はあえて間違えたんだよね、

実は」

「秀ちゃん」

「『嘔吐うそつきは泥棒』の始まりって言葉知ってる？」

「……スミマセン、本当は知りませんでした」

「……か、何なの、お前等の驚異のシンクロ率は。」

お前等さつき出会ったばかりじゃなか。

それなのに、どうしてそんなにシンクロして話す事が出来るの。

あれか、俺のコミュニケーション能力が低いだけなのだろうか？

それは何と言うか……嫌だな、何となく。

いや、こうして幼馴染の霧歌はともかく、出会ってまだ三日しか経っていないウリアとこうして仲良く話せているのだから、コミュニケーション能力が皆無という事は無いのだろうが——“仲良く”という部分は差し引いたとしても、だ。

「それで？ 秀ちゃん？」

「ん？ どうした、霧歌」

「秀ちゃんからも、ウリアちゃんの事を紹介してよ」

「紹介して——って、たった今ウリアから紹介があったばかりじゃ

ないか。ていうか、自己紹介の順番的に今度はお前がウリアに自己紹介をすべきだと俺は思っただけど」

「それはそうだけど……そうだけど。でも、これは私の勘でしかないけど——ウリアちゃんの事で、まだ私に何か隠している事があるよね？」

「……………」

全く、こいつにはいつも驚かされてばかりである。

忘れていた——霧歌にあらゆる隠し事は通用しないのだ。

先日、終業式の帰り道の際に俺が霧歌から心を見抜かれた事もそうである。

超能力では無いのだろうが——霧歌は人の心の内の、それも、隠し事有無について見抜く事に長^たけているのだ。

それは霧歌が人の事をよく見ているという事もあるのだろう——『観察眼』を持っている、とも言っのだろうか。

三つ巴？

とにかく、霧歌に隠し事は一切通用しない。

それならば——ありのままを全て語るしか他に道は無いだろう。

例えその“ありのまま”を霧歌が受け入れてくれなかったとしても。

「……あのさ、霧歌」

「何？ 秀ちゃん」

「今からウリアの事を語る前に——お前に一つ、忠告しておかなければならない事がある」

「どうぞ、何なりと言っちゃって」

「ウリアの事——今から話す事を聞いてしまったら、もう後戻りは出来ない。今、俺とウリアが関わっている問題に、お前は必然的に“巻き込まれる”事になる。知ってしまった以上は、お前は俺達に“関わってしまう”事になる——それでも、俺とウリアが隠している事を、聞きたいか？」

「うん、聞きたいよ」

「当たり前じゃない」と霧歌は平然とした表情で即答する。

「例え、秀ちゃんとウリアちゃんが隠している事がどんな事だったとしても——私はそれを受け止められる自信がある。それに……秀

ちゃんとは幼馴染同士、ウリアちゃんとは——友達同士。そんな親密な間柄に隠し事なんて野暮やぼだと思わない？」

「と、友達同士って——私と、あなたが？」

すると、ウリアが若干焦った様子で霧歌にそんな事を尋ねた。

そして、そんなウリアに霧歌は優しい笑みを浮かべて言う。

「勿論よ、当たり前じゃない。私はまだしていないけれど、ウリアちゃんは私に名前を語ってくれた——自己紹介をしてくれたでしょ？ 自己紹介を互いに交わした間柄というのは、その瞬間から友達同士になれるものよ。……まあ、尤ももつと、それはウリアちゃんが私の事を友達だと認めてくれないと成立しないのだけれど——どうか？ ウリアちゃん」

「そ、それは……その、私もあなたと友達になれるのはやぶさかではないと言つか、嬉しくないと言えば嘘になると言つか、むしろ嬉しいと言つか……」

「こういう時くらい素直になっただろうだ」

「う、うるさいわね！ 秀は黙っててよ！」

顔を赤らめながらウリアは俺に向かって怒声を放って来た。

まあ、何と言つか……嬉しいというのは本当の事なのだろう、今のこいつを見る限り。

ウリアの心を疑った訳では無いが。

「……それじゃあ、本当に話しても良いんだな？ 霧歌」

「うん、話してくれても構わないよ、私は。どんな話をされたって、私はその言葉を信じてみせるよ」

「だって」と霧歌は俺にそう言っただけで微笑み掛けてきた。

「他でも無い、秀ちゃんの言葉だもの」

「……そ、そうか。それは何よりだ」

その笑顔に魅せられて少し照れるように俺は霧歌から視線を逸らす。

すると、何故か俺はウリアから左足を踏み付けられた。

「痛ってーな！ 何するんだよ、急に！」

「……鼻の下が延びてるわよ、変態」

「えっ、マジで——ていうか、さり気無く俺の事をまた“変態”って呼び始めるな」

「ふーんだ」

「何を急に不機嫌になってるんだよ……まあ、いいか」

後でシーフードのカップラーメンを作ってやればウリアの苛々も治まる事だろう。

——だから。

「……それじゃあ、話すぞ、霧歌」

そう言つて——俺は霧歌に全てを打ち明けた。

ウリアが2056年からやってきた未来人であり、尚且つ、魔法少女だという事。

2011年以降——日本が、そして、この世界がどんな道筋を辿るのかという事。

そして、2030年に俺が古代の文明——『魔術』を復活させてしまふ事。

そのせいで俺は2056年の『混合機関 科学発展側』という組織から命を狙われているという事。

その組織の魔の手から俺を護る為に——ウリアはボディガードとして2056年の俺からこの時代に派遣されてきたという事。

俺はその全てを話した。

正直——霧歌はどんな話でも信じるとか言ってくれていたけれど。

俺は霧歌がそれらの全てを信じてくれるとは到底思っていなかった。前にも語った事だが——未来人だとか、魔法少女だとか、この世に存在しないはずの摩訶不思議な存在を人は簡単に信じる事は出来ない。

宇宙人然り、UFO然り、UMA然り——例え、それらを支持する人が居たとしても、その人々でさえその曖昧な存在を完全に信じていると言う訳では無いのだ。

何故なら——人は、実際にその目で見たものしか信じられないから。

それ以前に、俺の隣に座っているウリアという存在は——現在騒がれている宇宙人だとか、UFOだとか、UMAだとか、その辺の噂話とは訳が違う。

“2056年からやってきた魔法少女”——そんな余りにも馬鹿げた話を信じられるのはきつとウリアの力を目の当たりにした俺くらいだろう。

そう思って、いたのだが。

「なるほど……それじゃあ、ウリアちゃんは2056年の秀ちゃんが、この時代——2011年の秀ちゃんを——えつと、『デュアルシステム サイエンスサイド』だっけ？ その組織からこの時代の秀ちゃんを護らせる為に派遣された未来人で、なおか尚且つ、魔法少女——という訳なんだ」

「……………」

「……え？ 何？ 秀ちゃん。私の聞く限りではそう聞こえたんだけど……私、何か間違った事言った？」

「いや、間違っていると言うか——こんなとんでもない話を聞いて、それを素直に纏められているお前にただただ驚いているだけだ」

「素直に纏められているって——私、話す前に言っただよね？　どんな事でも、秀ちゃんの話は信じる、って」

三つ巴？

「いや、でも、お前——普通は信じないだろ。こんな何の確証も無い話なんか、普通は」

「確証は無いけれど、筋は通っていたから一応信じる事にしたの。2011年以降に本当に世界がそんな事になってしまつて、2030年に秀ちゃんが本当に『魔術』を復活させたとして、未来の世界が戦争を行っていたのなら——秀ちゃんはその組織みたいなものから命を狙われる理由は解るもの。『デュアルシステム サイエンス サイド』——アレよね？ 名前と今秀ちゃんが話してくれた事から推測するに、魔術と科学を合わせた結果、更に科学の方を発展させる事に成功した組織——みたいな感じよね？ 当てられた漢字を知らないから、まだ自信無いけど」

「いや、うん……大体合っているというか、もう殆ど正解と言うか……何で、お前そんな事解るの？」

「えっ、そんな事って？」

「いや、だから、『デュアルシステム サイエンスサイド』って組織の名前だけ聞いて、その組織がどんな組織か解るなんて——お前、やっぱりエリートの頭してるよな」

「えっ？ 普通は名前と今の粗筋あらすじを聞いたら誰でも解ると思うけどなあ……」

いや、普通は誰でも解らないだろ。

お前くらいだよ、そこまで理解できるのは。

しかも、余り説明の上手くない俺の語りで。

「……ていうか、こいつの——ウリアの、未来人で魔法少女という設定を霧歌は信じてくれるんだな？」

俺は霧歌に問いかける。

左側から「だから設定って言っな！」というツツコミが聞こえて来たような気がしたが——それはとりあえずスルーで。

「だから、信じるって言っているじゃない。何でそこまで頑^{かたく}なに秀ちゃん^{ちゃん}は私の事を信用しないかなあ」

「いや、信用するしない以前に——ほら、だって、“未来人”に“魔法少女”だぞ？ どちらかなら未だしも、両方なんて逆に怪しいとは思わないのか？」

「思わないよ？ ていうか、そんなのフィクションの世界だと案外粗^{いひ}にある設定だよ？」

「……まあ、確かに。“未来人、兼、魔法少女”という設定を否定してしまったら、2011年に大ヒットしたあの名作アニメを否定してしまうような気もしないでもないな」

「まあ、あれは実際には未来人じゃなくて、ただ単に一度経験した時間軸を何度も行き来していただけなんだけどね」

「霧歌、それ以上は言うなよ。それ以上のメタ発言は無しだ」

「でも、今の話をし始めたのは秀ちゃんだよ?」

「例えそうだったとしても、実際問題、根本的に悪いのは“未来人兼、魔法少女”という設定を持ったこいつだ」

「って何で私が悪者扱いされてるのよ! ていうか、何度も言うけど設定って言うな!」

「いや、お前の存在を否定する訳では無いけれど、逆に設定という言葉以外で説明しようとするの難しいんだよ、意外に」

「だからって必要以上に連呼する必要は無いでしょ! 次に“設定”って言葉使ったら、円環の理に導かれてしまったという名目の下に秀を抹殺するからね!」

「メタ発言が移った!? ていうか、何度も言うけどボディーガードのお前が俺に殺人予告をするのとはどうかと思うんだが!」

そんな時だった——俺の前で不意に霧歌が小さな笑い声を漏らしたのは。

「……霧歌?」

「あつ、ゴメンナサイ……。予想以上に秀ちゃんとウリアちゃんが仲良かったから、何かその掛け合いを見てると可笑しくなってきたやつて……」

「仲が良い? 違うな」

「私と秀はただ言い争っているだけよ」

「えーっ？　そうかなあ……私の見る限りでは、相当仲が良さそうに見えるんだけど」

そう言つて霧歌はまたフツと小さく笑つて微笑む。

「……そういえば、ウリア」

「何よ、秀」

「一つ聞きたい事があつただけ……お前、昨日『魔導獣機』を操つていた奴を倒したんだよな？」

「まあ、あの広範囲を一気に燃やしたから生きてはいないと思うけれど——『異空^{ワームホール}繋門』はそう簡単に空間に創り出せるものではないし」

「ワームホール？　何だよ、それ」

「ワームホールと言うのは、空間のとある地点ととある地点を結ぶ時空のトンネルのようなものよ。机上の空論だけど、既にアメリカの学者さんがワームホールを使ったタイムトラベルの方法が可能である事を証明しているわ。まあ、実際にワームホールを創り出す事は今の科学力では不可能だから、よつて、タイムトラベルも殆ど不可能に近いんだけど——まあ、そういう事で、解った？　秀ちゃん」

「確かに辛うじて理解は出来たが、どうしてお前がそうスラスラと流れるように説明しているんだよ、霧歌」

万能すぎるぞ、お前。

「まあ、とにかく、私は昨日『魔導獣機』を操っていた奴を倒したわよ、ちゃんとね」

「そうか……それなら、当分の間は安全——って事になるのか？」

「まあね。敵の方が新たな刺客をこの時代に送り込むまで——は、安全、かな」

「でも、お前が昨日倒した奴はこの時代——つまりは、お前の時代からすれば“過去”で死んだ事になるんだよね？ それなら、未来ではその事がすぐに解るはずだから、敵の方も案外間隔を空けずに次の刺客とやらを送り込んで来るんじゃないのか？」

「あら、秀ちゃんにしては中々良い所に気付いたわね」

「霧歌、褒めてくれるのは有り難いが“中々”という言葉は余計だ」

「それなら大丈夫よ」とウリアは言う。

「確かに、私達の時代からすればそれは過去の出来事なのだろうけど——重要なのは、死んだ人間が“未来の人間”だったという事よ。未来の人間が過去で死ぬという事は通常ならば有り得ない事——だから、未来の人間が過去で死んだ場合、未来の——例えば、新聞とかに、その出来事が“書き加えられる”」

「って事は……少なからず、未来が変わった——って、事なのか？」

「でもまあ、未来の人間が過去で死んだとしても、その人間は“本来ならばこの時代に存在しないはずの人間”だからね。歴史に加えられる事無く、未来の方でもまだ昨日の『魔導獣機』を操っていた奴が死んだなんて事は知られていないかも知れない——でもまあ、未来とはおそらく連絡を取っていたでしょうから、連絡が途絶えたら解っちゃうかもだけど」

「そうだったのか……それじゃあ、昨日の夜にお前が森林を焼き払ったのもそこまで未来には差し支えは無いと言う訳だ」

「……………」

「オイ！ 何故そこで黙る！」

「いや、だって、あの森林はその……現代のもの、だから。今の時代のものだから。未来で何かしらの変化が起こっちゃってるかも……」

「アバウトな説明で余計な恐怖を感じさせるな！」

「そうね……あの森林が無くなった事で、将来の地球の酸素量が半分以下に陥おちいってしまうかもしれないわね」

「霧歌！？ お前まで一体全体何を言い出すんだ！？」

怖い事言うのは止めてくれ！

俺はただでさえ命を狙われているんだぞ！ これ以上の恐怖はご免だ！

三つ巴？

「まあ、良かったじゃない、秀ちゃん。比較的だけど、安全だという事は証明されたんだから」

「おう、やったぜ、霧歌。これで漸く夏休みを満喫できそうだ」

「本当に良かったわね、秀ちゃん。これで心置きなく宿題がやれるというものだね」

「……………」

「……………」

「……さて、次の『魔導獣機』が襲って来た時の為に体でも鍛えるか」

「秀ちゃん、ちょっと待ちなさい」

「何だよ、霧歌。お前もトレーニングに付き合うか？」

「何トレーニングをするという前提で話を進めようとしているのよ、秀ちゃんは」

「これぞ俺の本当の力——話の流れを我が手中に収める秘儀、『川^リの如き話術』とはこの事だ」

「もう……また秀ちゃんは。カッコイイ技名で私を誤魔化そうったってそうは行かないんだから」

……。

「……スマン、霧歌。やっぱり今のは無しにしてくれ」

「えーっ？ 『川の如き話術』を？ カッコイイじゃない、どうして無しにしちゃうのよ、『川の如き話術』」

「霧歌、それ以上言うな。それ以上言われたら俺は羞恥で死んでしまっ」

「プツ……『川の如き話術』（笑）だっ」

「オイ、その金髪少女。笑っただけなら未だしも（笑）を付けてんじゃねえ」

……ていうか、川と言えば。

「……あつ、そうだ。折角、敵も居なくなっ安全になった事だし——ここは、お祝いも兼ねて明日は皆で泳ぎに行こうぜ！」

「ええっ！？ お、泳ぎに！？」

そんな素^す頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げたのは意外にも霧歌だった。

「ああ、泳ぎにだ——って、霧歌は別に泳げたよな？ 海でもプールでも」

「そ、それは、勿論だけど……そんな、急に言われても、私、困るんだけど」

「困るって……何が？」

「いや、その……」

そう言つて、霧歌は自分の体を――主にお腹の辺りを気にしているように見えた。

何なのだろうか。

「そつか……いや、別に俺が急に泳ぎに行きたくなっただけだし。霧歌は無理して付いて来なくても――」

「いや、行く！ 行くよ！ 一度誘われたからには付いて行くのが男の定め！」

「そ、そうか……ていうか、霧歌は女だよな？」

まあ、これで霧歌も同伴する事が決まったのだが――問題は。

「ウニ？ 何？ 明日皆で海栗^{うに}を食べに行くの？」

「……………」

やっぱり、この未来系魔法少女は海^{うみ}の存在を知らなかったか……。

「……オイ、ウリア。お前プール^{うみ}って知ってるか？」

「ウール？ 羊の毛の事？」

「未来から来たから仕方ないかも知れないが、それにしてもその知識の偏り方は一体全体どういう事だ」

「つか、どうして海栗を知っているのに海を知らないんだよ。」

海栗の名前の中にも入っているというのに。

それ以前に、お前最初に『魔導獣機』と戦った時に海岸という言葉をやちゃんと理解していたよな？

海岸を知っていて海を知らないなんて事があるのだろうか……。

「……あのな、ウリア。海栗——間違えた、海というのはだな……えっと、つまり」

あれ、おかしいな。

案外、海というものを説明しようとするのと難しいものがあるぞ。

さて、どう説明したものか——。

「海というのは……そうね、イメージ的には大きな水溜りを連想すれば良いかな。その水溜りに水着という泳ぐ為の専用の洋服みたいなものを着て、それから皆で水遊びをするのよ」

「えっ！？ 何それ！ 超面白そう！」

「……………」

霧歌の素晴らしい説明によって目をキラキラと輝かせているウリア

なのであった。

……っーか、俺の立場は？

「ねえ、秀！ 明日皆で海行くの！？ それじゃあ、私も連れて行つてよ！」

「解ってるって。最初からそのつもりで言ったし」

「7月だから、まだ人余り居ないだろうし……プライベートで遊びに行くなら良いタイミングかもね」

「そうだな……俺もカメラの準備を怠^{おこた}らないようにしないと」

「……………」

「……………」

「……………」

……あれ、何だろう。

ウリアと霧歌の視線が痛い。

ていうか、若干体に刺さっているような気がする。

気のせいだろうか。

「……………ねえ、秀ちゃん」

「な、何だ？ 霧歌」

「ちょっとそのカメラ、見せてよ」

「お、おう、解った」

その霧歌の提案に俺は二階の部屋からカメラを持って来た。

ちなみに、デジタルでは無く一眼レフの一般的な真っ黒い方のカメラである。

値段は——忘れたけど、かなりしたのではないだろうか。

「ふーん、中々良いカメラだね、これ」

霧歌は俺の一眼レフを掌で裏、表、更には側面など色々な部分を見ながら感心したような声を上げて——。

「ウリアちゃん、パス」

——ウリアの方へと一眼レフを放り投げた。

そして、宙を舞った俺の大切なカメラは。

「あつ、手が滑っちゃった」

不意にウリアの右手に出現した炎の剣に両断されてしまった。

「わ——っ！ お、俺の！ 俺のカメラが！ ウリア
お前何て事しやがる！」

「ゴメン、秀。手が滑って炎の剣を出しちゃった」

「出しちゃった、じゃねーよ！ 手が滑ってそんなものが出るなんて聞いた事も無いわ！」

「……………てへぺろっ」

「打^ぶん殴^ぶるぞお前！」

しかし、実際に殴った所で——まあ、殴るつもりは毛頭無いが——二つに割れたカメラは戻って来ない訳で。

「……………はあ」

どうやら、明日はカメラ無しで霧歌やウリアと一緒に海へと出掛ける事になりそうだ。

俺は単に思い出を写真に収めたかっただけなのに……………。

……………。

いや、本当だつて。

変な下心なんて無いって。

本当だつて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7335x/>

ボディガードは魔法少女

2011年10月21日15時15分発行